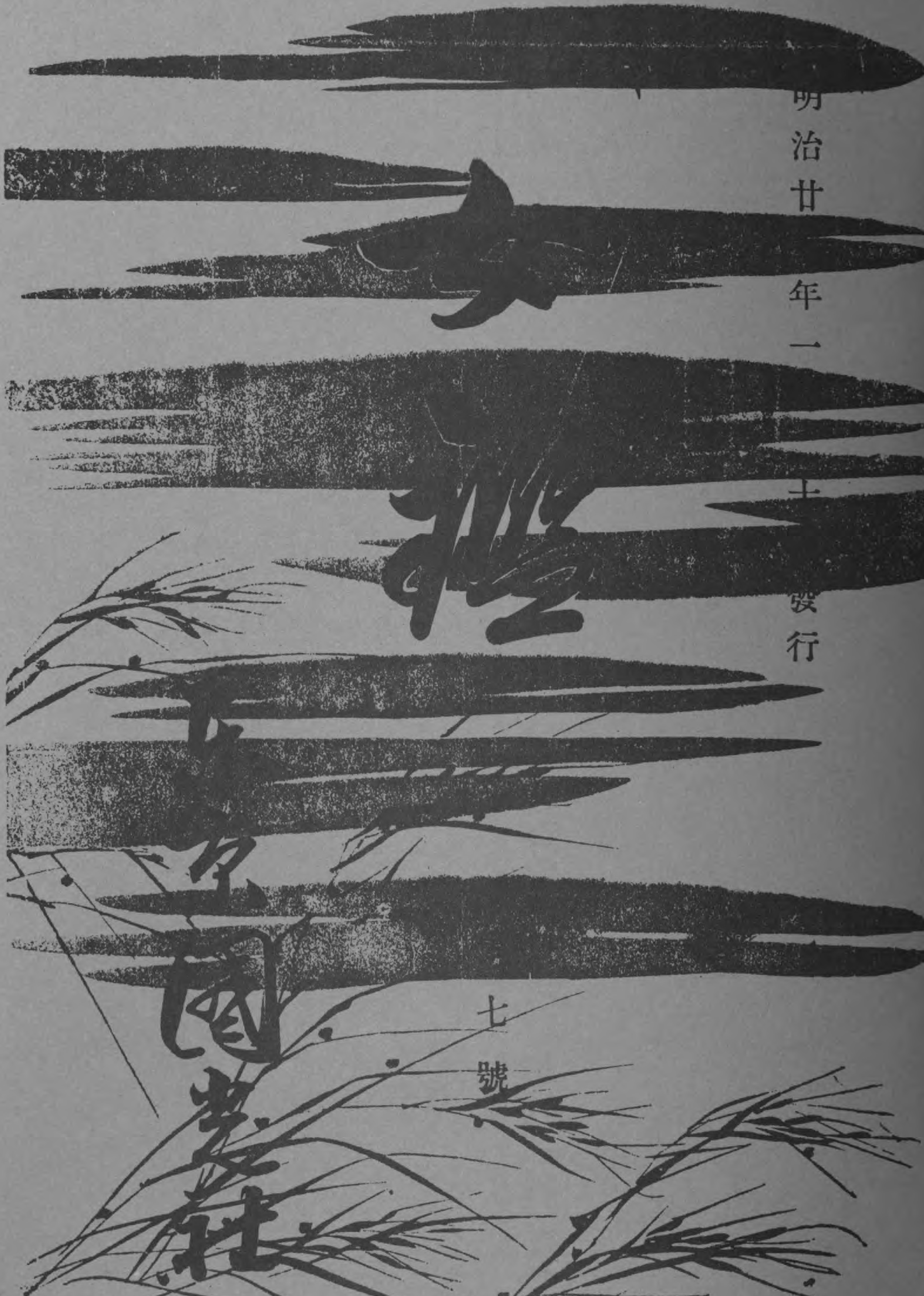


明治廿　年一　十　發行
七號

女鑑第七號目次

忍坂大中媛命



女鑑 第七號

女　鑑

初雪を見て感あり

明治廿五年一月十二日つとめて、おきいで、朝戸あくれば、霄の間に見し外山の雲は、曉かけて雪とやなりけん。庭いと白くふりつみて猶をやみもなく降りしきれり。みるまに一望千里世は一面の銀界となり、雲に聳ゆる高樓も、いふせき賤のふせ屋も、皆こと〴〵く、ひとしなみのものとぞなりぬる。

去年より、雪といふ雪の、いまだ降こざりければ、今この初雪のけしきを見て、老たる者は、爐を擁して木の芽煑るたつきとやなさん。壯なるものは酒あたゝむる媒とやなさん。詩人は吟杖を引き、歌人は歌袋の紐とき、童男童女は、寒さ

うち忘れて、雪達磨をや造るならん。人の心のさま〳〵なるこの初雪には、おのがじゝ思ふ所、感ずる所あるなるべし。あはれ世の孃等は、如何なる思ひをか起し玉へる。如何かる感をか起し玉へる。

想ひ起す。その昔、御前の御簾うちかゝげて、雪の爲に芳名を流したる、清少納言のことを。想ひ起す。伏見の雪の夕まぐれ、松の操の下折れて、みどり子の爲に、春まちわびし常磐の前のことを。又想ひ起す。芳野山峰の白雪ふみわけて、入りにし人を慕ひし、靜の前のことを。

婦人は何によりてか雪に緣ある。雪は何によりてか婦人に緣ある。古來婦人の雪に緣あるもの、信濃なる山路の雪と諸共に、春をも待たで消えにし者の如き類ひをも數ふれば、げにを指もそこねつべし。

そも〳〵、二夫に見えざるは、貞婦の美操なり。嫉妬の炎に胸心を焦さゞるは、良婦の美德なり。事に臨みて身を殺し、以て婦道を全うするは、烈婦の義績なり。その潔や皆以て雪の皓々たるにたとへつべし。

あはれ世の孃等は、この雪を見て、如何なる感をか起し玉へる。吾人は今この雪に對して、徒らに古を思ひ起して、淸氏の敏を羨むものに非ず、常磐の苦痛を悲むものに非ず、又靜の愛慕の切なりしを憫むものに非るなり。けだし今の世の婦人に欠く所の者、潔の一字最多し。吾人今この四方一面、くまなく白き初雪の景色を見て、直に思ひに浮ひしは、惟この潔の一字のみ。潔の一字は、今の世の婦人のよき鑑なればなりけり。初雪を見て感ありの實を記す。

女子教育論（三）

吾人は女鑑第一號に於て、女子教育の大切なる事の由は、其天下に於ける職守の一は、夫に奉事すると一は、子女を教養するとに在ることの大旨を論じたり。此の二大綱は、實に女子教育にとりては、最初にして又最終の目的とも稱すべく、内にしては家庭の教訓より、外にしては學校の課程に至るまで、此のほかに出づべからず。然れど一二不規則なる私立學校の教育を受て、やゝ男女同權の新説を聞きかぢりし人々の目には、夫に奉事するの一大綱は、とても角ても偏頗迂闊の説たることを免れざるべし。何となれば、かゝる人々は、女子にとりては、いとも公平なる説も、こよなき着實なる論も、其の先入主となれる新説の標準に合はざれば、一も二もなく偏頗迂闊と罵ればなり。

蓋、今日一二の人々が、もてはやせる男女同權の說は、一時極めて世に博く行はれし、スペンセルの平權論などより起りしならんか。此の論の誣妄おほきことは、其の本國なる英國に於て、早く既に之を論じたる人あるのみならず、我邦にても今日は最早一時の如くならず。之れをもてはやせるは、迷夢いまだ覺めやらぬ一二の人々のみに限れり。今此の論の建方の概略を擧げんに、上帝は人の幸福ならんことを欲せり。人の幸福を求めんには、四體五官の如き能力を自由に使用せざるべからず。故に人には此等の能力を自由に使用する權利あり。然ど人は一人にあらず。我に此等の能力を自由に使用する權利あれば、彼にも亦此等の能力を自由に使用する權利あり。故に一切の人は他人の同一自由を害せざる限り、其の欲する所に、此等の能力を自由に使用することを得と謂ふに在り。是を以て此

の論の建方に從へば、女も人たる以上は、男と同權ならざるべからず。婦も人たる以上は、夫と同權ならざるべからず。子も弟も共に人たる以上は、親兄と同權ならざるべからず。而して毫も上下尊卑の分を認むること能はざるなり。此果して天下の眞理にして、公平着實なる議論なりや。

上帝果して人の幸福ならんことを欲するか。人の幸福を求めんには、四體五官の如き能力を自由に使用せざるへからざるか。上帝の人を生ずるや、人々をして卒然二十四五歲の壯者の如くならしめず。又常に二十四五歲の壯者の如くならしめず。其の始めて生るゝや、四體堅固ならす。五官具備せす。何の能力を自由に使用して、以て其の幸福を求むべきか。人の七八十に至るや、四體既に朽枯して、五官も亦完全ならず。何の能力を自由に使用して、以て其の幸福を求

むべきか。人々は皆同權なるを以て、其の幼兒老親をしておの〳〵其の能力を自由に使用するに一任せんか。天下の幼兒は死して、老親は僵るべし。上帝の人の幸福ならんことを欲するは、唯二十四五歳の壯者にのみ限りて、幼兒老親に及ばずと謂はゞ、天下の無慈悲なるもの、上帝より大なるはなかるべし。上帝果して人の幸福ならんことを欲せば、豈此の如くなるへけんや。故に人の幼なるや、父母ありて之を養育し、其の老するや、子孫ありて之を救護し、以て其の幸福をして完全圓滿ならしむ。然れど之を養育救護せんには、養育救護を受くる者をして、其の養育救護に從はしめざれば、之を養育救護すること能はず。是に於て之を養育救護する者に、養育救護を受くる者をして、其の養育救護に從はしむる權利あり。之を要するに、人には優劣なきこと能はず。人の優劣には、時と

處とに因りて變ずる者あり。變ぜざるものあり。恩人の乞食とは、時と處とに因りて變ずるものなり。親子の如きは、天を以て優劣する者、豈に時と處とに從ひて、其の權利を變せんや。然れども子孫の救護を受くるときは、蓋し之に從ふ義務を守らざるべからず。此等詳細の論は、事深淵にして、一時の說き盡すべきにあらず。他日更に一書を草して、讀者の覽に供せんとす。上帝は人の幸福ならんことを欲す。故に優劣の兩者をして、相關聯交結して以て其の幸幅を完全圓滿ならしむ。

人に男女の別あるは、一に其の子孫の繁殖を謀るに在り。故に男の男たるは、其の夫たらんが爲にして、女の女たるは其の婦たらんが爲なり。是を以て男女の事は、一切夫婦の事に基きて、之を論ぜざるべからず。夫婦の共に室に居りて、子孫を敎養するや、其の關係父子兄弟の如くならずして、おの〳〵其の職守あり。婦たる者は、子を妊みて之を產み、之を養ひ育つることを以て、其の職守となし、夫たるものは、其の間に外に往きて、之が爲に衣食薪柴を集め、之

をして凍餒せしめざるを以て、其の職守となす、蓋婦の子を妊まざる時には、夫と共に外に往きて、其の衣食薪柴を集めて、以てみづから凍餒せざることを得べしといへども、一旦子を擧くることあれば、其の事業を中止して、家に居らざるべからず。故に人類の如き高等動物に在りては、夫は婦を養ひ、婦は夫に養はれ、夫は婦を救ひ、婦は夫に賴るを以て、通誼となす。是を以て之を觀るに、夫婦男女は、其の身體性情の如何を問はずして、既に優劣する所ある者なり。豈同權なりと謂ふべけんや。

且今假に男女夫婦をして、同權ならしめんか。女も婦も亦其の能力を自由に使用して以て其の幸福を求めざるべからず。いまだ子を妊まざるときに當りてハ、或は能く之を爲すものあるべしといへども、其の產室に入りては、將に如何せ

んとかする。今日の有樣を以てすれば、夫の之を救護することなくば、未子を産まざるに、早く既に凍餒して死すべし。此豈婦たる者の幸福ならんや。未開野蠻の國に在りては、夫婦に分業の法なく、婦も亦みづから養ひ、みづから子を生む有樣なるが如しと雖、事繁く業難き吾人今日の社會に在りては、遂に其の此の如くなることを望むべからず。世の男女同權を喋々する者は吾人の社會をして彼の未開野蠻の國たらしめんと欲するにあらざることなきを得んや。之を要するに、西洋諸國の議論は、箇人を主として關係を忽にす。然れど實際の事物は、すべて箇々獨立と、對待關係とより成れり。故に箇々獨立廢すべからざれども、亦對待關係を忘るべからず。此も亦他日詳論することあらん。然れど吾人は婦の職守を以て、輕小なりと謂ふにあらず。唯男女相集まりて家をなす以上は、婦は夫に奉事して、以て其の幸福の完全圓滿ならんことを求むべしと謂ふのみ。

論説

女權の定義（承前）

武谷水城

性權とは何ぞや、性法上の權利の謂、則人性天賦の道理の謂にして、人爲の法の許すと許さゞるとに關せず、宇宙に道理と信ぜらるゝの理法にて、之を一の權利と見做したるもの也、然るに、其理論固より未た確實ならず、元來權利てふ文字は、義務に相對して始て生ずと雖、此性法上の權利なるもの丶本相ハ、絶對のものあるのみならず、實に果して權と名付くべきもの丶、本態を暴露して、其定義を下し、範圍を定る事能はず、畢竟既生の權利とは全く別種のものにて、唯一派の學徒、彼朦朧たる泡影を捕へ來て、之に權の字を附與せしに

不過也、

因に云、此天賦人權說に正反したるものを、彼自然進化說、則優勝劣敗の論旨と爲す、是れ固より宇宙の狀態也と雖、偏に之を以て眞理と認め、其放縱に任せて、人爲の制度する無んば、世は全く弱肉强食の禽獸界と變了して止んのみ、其說固より獨り男女の上のみならす、社會國家の深害を來すへき事、遙に極端詭激なる天賦人權說の上に出ん、其說は他日に讓る、

凡そ天の万物を化成するや、人類に附與するに人類の特性を以てし、男女に附與するに、各男女の特性を以てす、禽獸草木亦皆然らざるはなし、万物各此天賦特種の儘を盡す、之を天性を全すと云、則性權を全すと云べし、之れ猶禽の飛ぶは獸の走るに等しく、男の剛毅にして國權を總理するは、女の溫柔にして

家政を主宰するに同きが如し、而共に其性を不傷、各天賦の用を全し、國家社會に對して、一體の効を奏す、今若此義を指して男女同權と名んか、意に於て不可を見ずと雖、辭は則大に不可也、何となれは、言辭の爲に實際を過るの實有事、今日目前比々觀る所の如なれば也、蓋、性權の本義猶曖昧に屬するのみならず、假りに其明確なる本態ありて存すと爲すも、其權とは本來性權のみの謂に非ずして、彼法權あるのみならず、今日普通指す所の權利なるものは、主に法權の上にこそあれ、此故に、男女同權の言辭は、其意義の如何を不問、斷して道理に違背し、人倫を破壞する、不法不祥の辭と爲す、

或は曰、法權は性權の進化したるものにて、隱より顯に移りたるもの也、故に人は男女老幼生ながらにして、平等均一自主自由の權ある者也と、夫其進化した

るもの、猶且平等均一なる事能はず、況んや漠然として其存在をだに認め難きものをや、抑天賦の性なるものは、或は範圍の外、人爲を以て如何ともなすべからざるものなり、若此天性に反し、猿にして犬の職を守り、牛にして馬の歩を試みしめんとするも、其天稟を盡す事能はず、人の男女に於るや、此の如く甚からざるも、亦大に類したるもの有、然るに一犬の虚聲は、忽ち萬犬の呼號を喚起し、時好に投じて漠然たる男女同權を唱へ、甚しきは彼法權をも、男女同一に占有すべきもの也と云ひ、其隨伴として、或は男女の職守を混同し其敎育を一にすべしと云に至る、而体格性狀の許さゞるもの有を不問、或は之を知るも、强辯を爲して、彼顧るに不足と云、玆に疑ふ、其説の掩はるゝ處のもの有事を、獨り純淸淑良、波瀾に應し易き幾多の女性が、此る新説を世に售らん

とする男子の材料に供せられ、相率ゐて魔界に墮落し、自ら其美を傷ふものあるを悲むのみ、

夫女性の身分、古今内外の事實に徵して、其沿革一ならず、之を其性格に徵し、其職守に徵し、我邦今日其改良擴張を計るべき者實に多く、女性其人の爲、一家の爲一國の爲、之を計るの急務あるもの、今更言を俟ず、只此改良擴張を望むの切なるが爲、漠然たる男女同權の新字に眩し、確標を不認して進むあらば、是猶方向を不定、目標無くして、妄りに船を暗夜激浪の中に行るが如し、啻に彼岸に達する事能はさるのみならす、終に覆沒の難を免れす、

我は法理哲理の學を知るものに非ずと雖、苟も權の本義明ならざれは、同權の是非を言ふも益なき事、猶空中樓閣の得失を爭ふに等かるへし、故に女性の倦

嫌を不憚、暫く所思の概旨を述と云、

前文の性權とは、英辞の所謂「モラール、ライト」にして、德權又は理權とも云ふを得べし、其詳説は法家あり、

（完）

婦女の愼むへき事を論す

關以雄

德貌言工は婦の四行、禮義廉恥は國の四維、人にして禮なくんは何そ遄かに死せさると、蓋此四行中一として之を欠かは、婦人の道備はると謂ふへからす、然るに方今女子を教育する渾ての學科は、文學的偏向のみにして、其結果を觀ても尙近時女流社會の操行は、之を十全なるものと稱すへからす、就中此四大行中、尤も憂ふへきは婦言の一點にして、口擇言なきより胚胎し來る擇行なき

は殊に甚しとす、然り而して之を誘掖する女傅も、之を正すを知らす、成立せんと欲する自己も恬として之を顧みす、饒言巧舌なる世波の風潮に澎湃せられつゝ、當然として心正に之を許せり、此を以て、翁媼をして校に就きしより人物變易の成績を非難せしめ、父母をして亦其操行の平穩ならさるを痛嘆せしむるに至る、吾人等、斯の如き言の耳朶を襲ひ來る毎に、己推して之を溝壑中に陷るの感を抱き、學校あるか爲、反て人の子を害ふ憂を懷かすんはあらさるなり、

嗚呼、現時校に敎ふる諸君よ、校に學ふ諸裙よ、何んそ倶に愼言の戒を記臆せさる、凡て人の世に處して必要なかるへからさるは、豈言を後にして將た何をか先とせん、其人一心を以て萬事に應す、言に匪れは曷をか宣ん、言ひて節に

中れは噬臍の譏を免るへしと雖、一旦言ひて理に適はされは、禍辱必之に從はんのみ、所謂、白圭之玷、尙可磨也、斯言之玷、不可爲也、故に詩に厲階の刺を記し、禮に出梱の戒を嚴にし、易に婦子嘻々失家節とし、諺に誾々謇々匪石可轉、訾々諓々烈火燎原と之を誡め、之を嘆するも、均しく之れ無據の婦言を戒愼せしむるに外ならさるなり、

我日本國將來の精華を維持し、固有の婦德を擴張せんと欲せは、萬事に應する代表者たる此言は、深く注意せすんはあるへからさるなり、夫れ南威の容あつて而して後、以て淑媛を論すへし、龍淵の利あつて而して後、以て斷割を議すへきなり、蘭芝蓀蕙の芳は、衆人の好む所なり、然るに尙ほ海畔臭を追ふの漁夫あり、嗚呼慨嘆に堪ふへけんや、

諸君も業已に之を覺知せらるゝならん、殷の紂王か天下を失ひ、鹿臺に焚死せしは、妲妃の言を用ゐしを以てなり、晉の献公か恭太子を殺し、國中大亂如何ともすへからさるに至りしは、夜半に驪姫の言を用ゐし故なり、夏傑の妹喜に於ける、衛靈の南子に於ける、夫差の西施に於ける、唐高の武氏に於ける、皆是れ婦言に昧ひて、遂に覆水盆に還らさるの失敗を招きしなり、其他智識なきの婦言を信して、宰相の位を失ひたる優孟あり、戀情なる婦言に牽引せられて下等の覺悟を敵陣に取りたる懦將あり、

然りと雖、符堅の汜水に全敗を取り、寧王の王陽明に伐たれし如きハ賢明なる婦言を用ゐさりし故なり、姜后罪を待つの諫は、周宣の晩朝を正うし、竇孫の規諫は、高文をして唐政を美ならしむ、漢明帝の馬皇后に於ける、漢和帝の鄧

皇后に於ける、明皇帝の慈皇后に於ける、其他孟母肉を買ひて信を敎へ陶母鮓を封して廉を敎へ、子發の母は、其恩なきを責めて楚相を全からしめ、王孫賈の母は、其不義を讓て忠臣の名を發けしめ、田稷子の母は反金の訓を悟し、樂羊子の妻は、斷機の憤を示し、晏御揚々の譏は夫をして賢ならしめ、陳國長公主は、兄を詈りて帝王たらしめ、妾婧は、牛角の歌を辨して賢相を得る等、婦言の賢明如何に因て成敗し、得失するもの瞭々乎として火を視るより明かなり、智識に富み道德に完全なる婦言は、丈夫も階を下らさるへからさるの利益あるも、饒言巧舌浮辭薄口翩々として德に背き、飄々として學に乏しき婦言の害は、天下之より恐るへきはなし、寄語す、諸君の一言一行は、反りて男子の言行より勢力の偉大なるを、試に見よ、石を探て水面を打たんか、石は水面の一局部

を打つと、其波圏の重層輪轉するを、

史談

忍坂大中媛の命の事を記し奉る

長屋基彦

忍坂大中媛の命は、稚渟毛二岐の皇子の御女にして、允恭天皇の御妃に坐す。天皇、未皇子にておはしゝ時、反正天皇崩御ましまして、日嗣の御子坐しまさゞりければ、群臣議りて曰く、仁徳天皇の御子、雄朝津間稚子の皇子と、大草香の皇子とハ、ともに天の下の君とましまさむ御心のおはして、御名もひろく聞えさせたまへり。わきて雄朝津間稚子の皇子は、御齢のたけさせ給へるが上に、御心ばへさへ、いとけ高うましませば、此皇子をこそ御位には、即かせ奉るべけれ」とて、吉き日選びて、天津日嗣の御璽をなむ奉りける。さるに皇子は、謙遜の御性質に坐しゝ故、むげにいなみ給ひて、「天津日嗣の御位はいと尊く、天の下の政はいとかたし。蒼生の父母たらんことおほろけなる事にあらず。聖賢たらん人の職にして、下愚なる者の任に

はあらさるなり。更によき皇子を選ひて立つべし」とのたまふ。群臣かさねて申しけるは、「天津日嗣は、天祖より歴代の天皇に授けさせ給ふものにしあれば、私に一日も曠うすべからず。臣等がかく請ひ奉るは、即天祖の御心なり。天命は避け給ふ可くもあらず。いま殿下臣等の請を許したまはずば、天つ日嗣を輕みし、天祖の大命に逆ひ給ふなり。天の下百姓の望み、終に絶え果なむ。よし御心に協はせられずとも、枉げて御位には、即せ玉へといふ。皇子なほ辭み給ひて、「吾篤疾ありて、行歩になやめれば、百姓にかはりて、宗廟社稷に仕へ奉らんこと、いと覺束なし」とのたまふ。群臣みな曰ふ。皇祖の宗廟を奉け給はんは、皇子を措き奉りて誰をか求め侍らん。願はくは受させたまへ」といへど、猶ゆるし給はむ樣も見えざりければ、群臣みな憂へ惑へりき。忍坂大中姫命は、いかに思はしけむ。御親洗手水を執りて、皇子の御前に進みいで給ひぬ。さて啓し玉ふやう、「殿下の辭み玉ふはさることながら、天位の空しきこと既に久しうなりぬ。御國の憂はいかばかりならん。群臣百寮の嘆き吟ふさま御覽しつゝも、あはれとは思召さずや、とてもかうても、殿下御位に即き玉はでは、天の下の嘆はやまドを」とまをしたまふに、皇子はいとゞものう

き事におぼして、背き居て、一言のいらへだにし給はざりき。されど大中姫命は、退らんともし給はず。さながら四五刻ばかりも侍ひ給ひしに、捧玉へる鋺の水溢れて腕にかゝりぬ。をりしもみ雪ふる冬の頃なりしかば、かゝりし水は忽に凝りぬ。露をたに厭ひ給へるかよわき御身、いかに御心の剛くましませばとて、この冷さには、堪へ難くやおはしましけむ。やがて身もしなへ、目さへ眩めきて、ほと／＼斃れんとし玉へり。皇子顧みて驚き立ち給ひて、扶け起してのたまふやう、「天津日嗣の御位は、いと重かる故にこそ、たはやすくは諾はざりしなれ。されどよく思へば、群臣の請ふ所も、事理いと明なるがうへに、かくまで人の切なる望にれ、爭でか辭みはつべき」とのりたまふ。大中姫命、即仰ぎ顧て群臣に告げて曰はく、「皇子人々の請をゆるし給はんとは、仰せ給ひしぞ。疾く璽符を奉れ」とのたまへば、群臣大に喜びて、たゞちに璽符を捧げ上る。皇子受けたまひて、御位には即かせ給ひけり。後に允恭天皇と申し奉る即これなり。さてその翌くる年にぞ、この姫御子を皇后とはなし給ひける。

初皇后御母とともに、家におはしし時、獨苑の中に遊ひ玉ひぬ。をりしも闘鷄の國

の造、馬に乘りて傍の徑より趨せ來りて、籬に莅みて嘲りいふやう、「汝よく園を作れりや。予に蘭一もとを與へよ」といふ。皇后「何せんとてか、蘭をば求むる」と問はせ玉へば、「山を行くに、蠛を撥ふなり」とぞ答へたりける。無禮なりし辭つきかな。誰かは惡しと思はさらむ。さては民を治むる樣も、思ひやられぬべし。されば きさきに居させ給ふに至りて、覓ぎ出でゝ刑はんとし玉ひけるに、國造謝して曰く、臣が罪の深さは、死にてもえ償ひ奉らざるべし。されどそのかみは、貴き人と坐しますことを知らざればなり。あはれ、ゆるさせ給へ」といひければ、さばかりにくみ給ひしにも、又いとをしとや思しけむ。終に其の罪をゆるさせ玉ひけり。又天皇の寵妃弟媛といへる、河内の國の茅渟にすまひてありける許に、屢行幸し玉ひけり。皇后かくては世の御覺もいかゞあらむと奏し上げ玉ふ樣、「妾嫉む心は、露持ち侍らねど、度しげき大行幸に、百姓の苦いふはかりなしと承りぬ。あはれ、數をだに縮うせさせ玉へ」と申し玉ひければ、天皇納れさせ給ひて、御幸もいと稀になりきとなむ。

天の下の大御母と仰かれ玉ふへき御身には、自なる御德を備へさせ給ふべければ、

普通の人にこれを責めんとするは僻業のやうにはあれと、道を踏み義を行ふ一端にいたりては、上下の差、貴賤の別はあらさるへし。さてハこの皇后の身を忘れて、即位をすゝめ參らせ給ひしは、固より天下の爲なり。行幸を緩うせんと請ひ給ひしも、國の爲なり。國造を罪せんとし給ひしも、民の爲なり。そをゆるし給へるも、一人の怨をすて給ひしなりけり。その爲し給へる事、一として私に出るはなし。君は國をもて家とし給へは、君の國を治め給ふは、猶衆人の家を治るか如し。私なくして國を治むれは、國必平ならん。私なくして家を齊へは、その家必さかえなむ。まして、化は内より興るときけは、女子たらむ者はこの心掛をこそ、いやさきとはすへきなれ。あはれ、世の女等よ。もし善くその家をとゝのへむとならは、念頭たゝ家ある事を思ひつゝ、この皇后の國の爲に身を忘れ給へるにならひてよ。

松田助八が娘さつ女の事

竹野節雄

石見國濱田の城主松平周防守康豊の夫人は、龜井隱岐守の女なり。里附の局を澤野といへり。落合某が女にて、年ハ六十になりぬ。性質短慮にて情すくなく、奥女中

みな憚り惡みけり。又お道とて、心ざま柔和にして、夫人の殊に寵愛せられけるがあり。ころは享保二年卯月の或日の夕つ方、夫人初郭公の啼くを聞かれて、あだに聞とはいなし。みち呼びて琴を調べさせながらにとて急ぎ召さしめ給ふ。おみちは下女のさつに髮をつけさせ居たりけるが、度々の御召に、髮も大方にし終へて御前に急く。上草履の見えざりければ、さつのここかしこと搜しもとむるうちに、側にありける上草履を、心ならずはいて走り行く。さて御前にての琴も常より妙に調ければ、夫人殊に興を催されけり。暫しありて御前を退らんとせしに、澤野が、此草履挨拶もなく誰かはきしぞ、不作法なりと怒り罵る聲聞へげれば、出でゝ見れば前にわがはきし上草履のことなりけり。おみちは驚きて、餘り心急ぎし故まつたく心ならずはきちがへたるなり。妾の疎忽今更申譯もなし。御堪忍なされくださるべしと、草履をとりて局が前に置く。局は益怒りて、そなたは士の娘ならすや。まして武士の御家に御奉公をするからは、武士の禮式をば知らではならぬ事なり。他人の草履をあいさつもなくはき、咎られて、御免なされてとのみいひてすむと思ふにや。男どしならば決して堪忍ならぬことぞかし。しかのみならずこなたがはいたる跡を

わしにはけとは不禮なり。此草履そなたにおますと足にて蹴つけ、奥をさして入る。おみちハ局を見かへり見かへり、涙に咽びて部屋に歸り、默然として居たり。さつは主の顏色の惡きを見案せられて樣子を問へば、草履のまちがひにて、親までの耻辱を受たる事の無念なりと涙をはらひつゝいひければ、さつは、夫ほどのまちがひはいくらもあるならひ、必ず氣になかけたまひそと色々なぐさめければ、主の心も和らぎける樣子なるゆゑ酒肴とりそろへ、今霄は御用もあるまゝ、御酒一ッと進むれば、おみちは悦びともに酒汲かはし機嫌よげなり。お道は帶と小袖とをとりいだしさつにあたへていふやう、そなたが日頃眞實に世話してたもるゆゑとうより與へんと思ひたりしかど折もなかりし故、是を肴にさゝ一ッ過してといひければ、さつも悦びて受く。おみちは人の命ばかりはかなきはあらじ。一夜の後の明日をもしられずと涙ぐみければ、さつは御兩親樣のましますうちは、御壽祝ひ給ふこそ道ならめ。必々さるいまはしき事はのたまはすなと諫む。おみちは悦び、父樣母樣にもかりそめの孝行もなさずにと涙をおさへて床に入る。さつも臥所に入る。夜も更け人も寢しづまりたる頃おみちは起きて、涙とゝもに文書き終へ手道具など皆文庫に入れ、

さてさつを起して、此文箱を矢倉の父樣母樣へとゞけてよ。委細は文に認めありとさつに渡しければ、さつ心はすゝまねど主の命なればと出て行く。日比谷御門の邊まで行きしが、胸うちさわぎ非常に心地あしくて、萬の事いまはし思はれける故、矢倉へは行かずて、急ぎ歸りて襖押し明け、屛風の中を見たればむざんやおみちは、夜着ひきかつぎ、白小袖に水昌の珠數を首にかけ、普門品を持ちながら血にそみてうつぶし居たり。(刀は來國光の作といへり) さつは之を見て氣もてんどうせしが、心を靜めおみちが側により大に恨み歎きしが、又思ひ直し、爰で狼狽ては犬死となしまゐらせむ。こゝぞ大切の塲ときつとうなづき、衣服を着替へいそぎて局の部屋に行きけり。

(未完)

家政

育兒小言 (十六)承前

武谷水城

亞米利加合衆國開國の大統領「ジョージ、ワシントン」の母、亦近古稀なる賢母なりけり、常に其夫を助けて家政を理め、婦人の技藝に熟達せしのみならず、書を讀みて

略物理にも通じ、殊に育兒の一事は最も意を用ゐし所にて、人たるもの、如何なる大功業を樹て、如何なる大學者と爲るとも、品行正しからず、私の情公の心に勝つものは眞正に尊むべき人に非ずと爲し、多勢の小供を敎へ導くに、常に此義を標準と爲し、自身亦是を標準と爲して、常に言と行との違はざる事を守りけり、此至誠の感應は、早くも和聖東が幼時の行爲に顯はれけり、和聖東幼き時、他の小兒と遊嬉するに、少しにても約束せし事を違へず、假りにも虛言を吐かず、此一事早く他の小兒を心服せしめしと云、其父嘗て遊嬉の爲にとて少さき斧を與けり、父は植物の業を好み、數多の華木を培養せし中に、秘藏の若木ありけるが、和聖東は幼心に何の氣も附ず、斧もて此若木を切取けり、父は和聖東の所爲ならんと推せしが、彼か常に虛言を吐かぬを知りければ、彼を招きて直に問ひけるに、和聖東は此時初て、善らぬ業を爲ししと心附しが、暫時の思案をだに爲ず、賜ひし斧もて切り取りぬ、詐りを申候はず、と答へしかば、父は我子を懷きつゝ、いかに「ジョージ」よ、汝が眞の一言の爲には、我が總ての華木を失ふも憾みじとて、いたく其誠實を悅びけり、和聖東が十一歲の時に父歿し、弟五人ありけるが、母は寡居して再嫁せず、自ら家政

を總理し、父世に在りし時よりは一層深く、心を子供の敎育の事に盡しけり、何れの國何れの家にても、女の戶主に小供さへ多くある時は、財産の多少に係らず、故障の興り易きが慣ひにて、和聖東の家にも樣々障礙の事共生しゝも、母は貞嚴と勇氣と慈愛との三の者によりて、長き年月の間此等の難事に打勝、常に其子を導に、至誠廉直高尙の心を以てせしかば、和聖東は母の敎訓肝に銘しぬ、米國のいまだ獨立せざる時、和聖東は米國砲隊の兵士と爲らん事を思立けるが、母は是を諫めて、斯る少き事に志さんよりは、一身を犧牲と爲して、此米國の爲に盡すこそ、神に對する爾の義務なれとて、樣々に勵ましけれバ、和聖東は更に高尙の志を養ひぬ、後ち本國なる英國と隙わるに當り、母は和聖東を勵まして、國の爲にとて打立しめけり、和聖東身を挺んてゝ義勇軍の長と爲り、連りに戰ひて連りに敗れ、饑て食なく、凍へて衣なく、霜に臥し雪に行き、病めども藥なく、疲るれども眠ること能はず、屍躰は壘々として野に横はり、血は流れて川を爲し、子は父に別れ妻は夫を失ひ、人間の慘狀を極めしも、終に一卒の叛き去るものなく、辛苦艱難七年の長きを經て、終に英軍を降し、亞米利加の大陸に合衆國てふ一大國を造るや、民の歡び迎ふる聲

湧が如き中に、再度迄開國の大統領と仰がれしが、昔者若木を切りし時の心根は、更に變る事無く、此時大に成長發育して、國家經綸の上に顯はれ、淸潔廉直、公に奉して私なく、寛厚謙讓其功に誇らず、新開の國に至當公平なる法を貽して、彼國萬世の掟を定め、富貴を見る事土塊の如く、淡然として人界の榮譽を顧みず徐に劍を脱して故山に歸り、銃を賣りて犢を買ひ、朝たには東巷を耕して農夫と談し、夕には書を拔きて閑に古人を友と爲し、復た昔日の事を語らず、卒して米國の國父と仰がれ、新世界の聖人と稱へられしも、其慈母敎訓の種子、發育して玆に至りしに外ならず、されば後の和聖東の傳を作るもの、又云へる事有、其母專力敎育の恩賞として、存生の中に其子の皆成立して、榮耀なる地位を占め、其父母を顯すを見るに及べりと、或刀自の和聖東を咏して、

心なく切し若木は末終に、のび立國の棟也けり、

こをまた或人のよめる、

母曾葉の蔭なかりせばやどり木の、國の棟と立やのぶべき、

和聖東に繼で大統領と爲りし「ジョン、アダムス」、亦曾て其品行の母より感化を受け、

永く存して消滅せざる事を述べて、我小兒の時に至極大なる幸福を受たり、そは我母常に小兒の品行を陶鑄せんとて、思を勞せられたる事也、我此時敎法の訓誨と、修身の敎育とを受し事、後來我生平に貫徹して、暫くも記臆を離れず、今より爾後我若し母の敎訓に違ひ、或は不可なる擧動あらば、そは全く我過失にして、母に背くの罪免れずといへり、

近世蒸氣の理を發明して、利德を萬國の人に貽したる、「ジョン、ニウトン」の如きも、幼時其母の感化薰陶を受て人と爲り、其業をも成したるものなる事、其傳にて知るべし、

支那にても歐米何れの國にても、斯る例のみを集る時は、大部の書を編むを得べし、數へも盡くさるべきに非ず、只父の敎訓固より其子の行爲功業に關ると雖、精く調べ見る時は、特に母の感化敎育の大なる關係ある事實を見出す事、彼此符を合せたるか如し、我朝小楠公の事の如きも、固より嚴父遺囑の敎に依るとは雖、抑亦慈母泣諫の訓無りせば、あたら櫻井驛の言葉の花も、四條畷の春を待ず、早くもあだに散るべかりし也、さて我朝の賢母の事跡共は、次々に寫し出さるべければ、茲には

引例を見合せぬ、以上は只叙事の序でに外國二三の賢母の例を引しのみ、内外を轉倒すとな思ひ玉ひそ、

女禮式

有住齊

一飯鉢出し様付蓋下け様

まづ飯鉢を臺に載せ、杓子をうつ向け手前に置て持出て、下座に扣へ居べし箸を休められたるとき、兩手にて蓋を取り、湯氣の上座の方にみゆる様に、裏を向にして、鉢の手前の端にて露をきり、仰むけて盆に置さて杓子をとり仰向けて、飯鉢の中に入れ、人前に持ゆき、上座の方に置き、少しすゝみ出て右手に左手をそへ椀を受とり、左手にうつし、二杓子ばかり盛りて、又右手に移し(口傳書に二杓子半とあり)左手を腕に添へてまならすべし、客の人品輕きは其儘右手にて出すべし、尚かろきは、初めより右手に受取てくるしからず、蓋取りのものは、盆を持て、飯鉢の者につゞき出て、下座の方にならび扣へ居て、飯鉢のふたをとりたる時、盆にうけて直に立つべし、

按ずるに、飯鉢を持出て、貴人の前にてもる事は、中世よりの習はしなるべし、源氏物語に朱雀院脱屣のゝち、はじめて飯鉢にて供じたる事みえたり、是をみれば、僧の行狀のうつりたるにて、茶道よりやはじまりけん、汁の盛かへをはじめ、何事も勝手よりもり出て供するが常禮なるに、飯鉢のみ持出て、給仕するはあたらぬ事なれども、禮書に出て、年久しき習はしなれば、今さらに改めがたし、又持出るも不作法ならぬ如くになり來れば、本文の手つゞきに、ならふべし

一汁盛替出し樣

もり替を膳に据ゑて持出て、人前にてふたを取り、膳の手前のうちにかけ置、空椀を取りて、持出たる膳の端に置き、盛替をさし上け、から椀を膳の眞中に直し、持て、立なり(盛替すみたらば、又飯鉢を出して後、かよひの者膳ばかりを持て出てゝ、何にても替へらるゝ樣うかゞひ若し汁の類替りあらば、盛替を持出て、又飯鉢を出すべし、只膳ばかり持出て、空わんを受取りて勝手に入り、盛かへて、更に持出ると云ふ、習はしもあれど、いたづらに時間をうつし、通ひの者の出入

をわづらはすのみにてかへつて見ぐるし、二禮には初度の替りいかならず別椀にもり持出て、引替にするべきなり）

一盃臺出し樣

飯終りたらバ、中酒の盃臺を持出て、上座の方に置き（正面座の時は、右の方に置くべし、此以下引替にする手つゞき、總て是に同じ、新たに持出る膳を、仮にも下座に置き、取り下ぐべき物を、上座に置かぬものなり）燒物を取り、下座の方に置き、其跡に盃臺を据ゑ、燒物を持て立つなり（燒物を本膳の向ふに、据ゑたる時の事なり、臺引あるときは、まづ臺引を下げ、次に燒物を下げ、後に盃臺を持出て、本膳の向ふに据うべし）中酒一獻すみたらバ、此盃臺を下ぐべし

一中酒出し樣

燗鍋の口を向にして、つるを右手にて下よりもち、左手にて燗鍋の下をうけ、持出て、中座して下に置き、左手を脇につき右手は猶つるを持て扣居り、やがて起ち出て、下座の方にまゐり、左手をつき、一とすゝみしてつぐべし、正面座の時は、貴人の左の方に進みよりてつぐなり

當世膳中、半に出すを中酒と云、むかしは飯後に出すを中酒と云是本膳と後段との間なればなり、古は間を呑を中呑と云、大中などもいへり、今はあいとのみいへり、時代によりてことばは同トけれども其所作のかはれるものありとしるべし

一 吸物出し様

吸物膳を持出て、上座の方に置き、二の膳を取り、下座の方に置き、其あとに吸物膳を据ゑ、二の膳を持立つなり、中酒の盃二の膳あらば、引替たる後、盃を取て、吸物膳に載せて立つべし、但次第により、中酒すみてのち、主客盃の二あるは、まづ肴物を出し、後吸物を出すことなり

家内衛生（六）

三笠舍主人

食物の續き

肉類にては、獸肉鳥肉最も滋養多く、魚肉之に次ぐ、其性分は彼此小異あれども、彼滋養分の重なる蛋白質は、主として此等の肉類中にあり、故に植物性の食物に比

すれは、滋養の力大なり、蛋白質の外、猶脂肪及二三の物質を含む、
但肉類の滋養の力此く大なりと雖、肉食のみにては亦決して身を養ふに足らず、必ず植物性の食物を併せ食するを要す、其故は滋養分の重なる、蛋白質は、主として肉より資り、又脂肪も肉より資りて餘有と雖、獨彼の滋養分の一なる澱粉は、植物性の食に籍らざれは、毫も資る事能はざればん、之とかはりて、植物性の食物中には、極て少分ながら一種の蛋白質もあり、又脂肪もあるのみならず、体内に於て澱粉よりも化生するが故に、彼の五種の滋養素は、極めて不十分ながら備はれり、是れ肉類の滋養の力至大なるにも拘らず、單に肉食斗りにては身を保つに困難なるも、植物性食物のみを食て、肉食せざるも、不充分ながら生活を保續するとを得る所以なり、且是に依りて、植物性のものと、肉類とを併せ食する事の、大切なる所以を知るべし、
獸肉中にて最も多く用ゐ、亦最も滋養多きものは牛肉也、羊肉、豚肉、猪肉、鹿肉、兎肉、緜肉、等皆食用に供すへし、近來は馬肉をも食用に供するもの多し、牛肉は滋養に富むのみならず、尤消化し易きものにて、病弱の人杯に用ゐても、毫も胃腸

に障る事無し、羊肉も牛肉には稍劣るも、滋養多く消化良し、豚肉、猪肉等は脂肪多きゆゑに、牛肉よりも消化遅く、胃に滯り易し、特に豚肉は其肉中に、一種の虫寄生する事多し、故に半熟にて食べからず必ず、熟煮すべし、猪肉は一種の脂肪を含む事多し、多食すべからず、又馬肉は牛肉には劣るも、滋養の効多し、總して草食動物の肉は、肉食動物の肉より消化し易く、味も亦美也、凡て何肉に限らず、硬きものは消化し難ければ、柔なるものを撰べし、故に幼獸の肉は老獸の肉よりは消化し易く、滋養の力大なり、肉類は凡て煮て食し、若くは炙て食すべし、是れ最も消化し易きのみならず、然かせざれば、肉中に小虫若くは虫卵ありて、害を爲す事あり、獨逸は中古以來、豚肉を生食する國俗なりしが、之が爲に其筋肉中に、「テピシチ」と名る一種の虫を生して、病を釀し、是を「テピシチ」病と稱へて、百法藥用するも奏効なく、爲に死せしもの不少、我が明治の初年、衆醫會議し、官に建議して、豚肉の生食を禁止せしかば、此病殆と絶たりと云、十分に煮、又は炙て食する時ハ、此等の害更に無し、

肉は總て新鮮のものを撰ふべし、鮮肉は其色赤く光輝ありて、多少彈力あるものゝ、

若其色暗竭にして透明ならず、或は一種の穢色を帯ひ、或は軟かにして彈力なく、脂肪軟かに解けて、黃色を帯たるもの、或は一種の微臭あるもの、或は黃色の液を含みたるもの、或は空氣を含みたるもの等は皆陳く、或は腐敗に傾き、甚しきは小虫を生したるもの有、皆害有、注意して用べからず、

牛肉馬肉は、姦商時として病獸の肉を鬻く事あり、過て是を食ふ時は大害あり、病獸の肉は、其新鮮のものと雖、肉色自ら鮮明ならず、されとも一目して健肉と、明かに鑑別する事難し、此等の疑ある時は、肉の出所を糺すべし、英獨諸國にて、食用に供する牛を鑑定する法あり、牛の鼻の熱したるもの、(牛鼻は常に冷なるもの也、病ある時は熱すと云、)又は皮膚に小瘡あるもの、或は毛の色光澤なきもの、或は非常に多く唾液を流出するもの、等は皆健康に非ざるの徵とす、故に屠殺を禁ず、又瘦牛、老牛、も食用に堪へず、四歲を超えたるものも、多くは食用に不供と云ふ、

牛馬の肉の外には、病死の獸肉を鬻く事殆と無し、

近來牛肉其外鳥獸の肉類を、鑵に詰め、空氣を拔取りて密閉し、貯畜携帶に便に爲たるもの有、効用味とも、殆と鮮肉と異ならず、鑵を開きて直に食ふべし、時を經

れば腐敗し易し、又塩藏肉は効力味ともに劣れり、航海等の己を得ざる塲合に非れば、特更に用るの要なし、豚肉の臘乾の如きも、必須の品に非ず、多食すべからず、本邦の佃煮は、塩藏肉より良し、肉類少き地方の旅行等にハ携ふべし、

○左の一節は、前回豆の條下に逃ふへきを落したれは、爰に追錄す、

豆腐は大豆にて製したるものにて、滋養の効最も多く、植物性の食物中にて随一の食料とす、常人は勿論、胃の弱き人、及病人も是を食して、少も害なし、但身に小瘡などを生したるものは、多量に食すべからず、又油揚と爲したるものは消化遅し、多食すべからず、總て豆腐に限らず、油揚類は胃に滞り下痢を興し易し、多食すべからず、「ゆば」も亦善良の食料なり、

茶事（承前）

藤井行麿

十會　香爐、香盡、一客、拜領、名物、
外題、賞翫、名水、雪、月、

○香爐、名物の香爐は香を炷ず、灰を押切にして、長盆に香合を添て飾置べし、名香れ包紙のうへにその名をしるして、一たきすへき程飾りおくへし、またきゝ香爐、

其外をし鳥、獅子のたぐひ、すべて造りものに香爐は空炷して置くべし、
○壺飾、おきどころ七箇所あり、床の眞、軸先、柱前、潜口、正面、同脇、角折、道幸、何れも、大壺の置所なり、小壺ハ棚に上てかさるなり、
○一客一亭の時、濃茶を催せは、亭主客を迎に出てゝかへる時露地うち中門などあれは、戸をさゝず潜り口もあけ置て其儘入べし、膾炙も、後入の茶も、亭主相伴すべし、客ひとりなれば、對屈させぬやうすべて注意するなり、客功者の人なれバ、十體の仕方いつれをなしてもよし、
○拜領、されは何品にても、其物を恭しくとりあつかひ出して見するなり、茶碗、茶入等は、所謂盆點唐物點などにして、客そのしな別に所望せずとも、亭主より風聽してかならす出し見すべし、
○名物、外題飾、賞翫、この三ッはかさり方いさゝかづゝ替りたるまでなり、外題荘はかけ物を軸盆にのせ、床壁付より八寸ばかり明て竪に置べし、客に外題の文字見ゆるやうにするなり、懐石すみてのち客に所望してかけさするか、また中立の間に常の如く亭主掛るかなり、賞翫のしなは名物に非ず、拜領にあらず、亭主秘藏し

て人もゆるす物をいふ、

○名水に、催す茶ハ、まへかた客に風聽すべし、利休醒井の水にて催したる時、かまに藁の封をして、點茶せしとわり、客薄茶のとき湯を乞ひて味ふべし、

○雪、積雪に茶を催せんと思はゞ、空のやうすを見て降らむとするまへ、露地の掃除して待べし、夜の間にふかく積りたる朝、とく起てすべし、庭のつたひ石だけ、水か湯にて消し、樹木も袖摺になる枝は掃ふへし、利休雪のわした、藪の内紹智を蓑笠にて訪らひたるに、紹智むかひに出し時、袖香爐を袂より出し居士にわたされたり、居士もまた袖より出して紹智翁にわたし、取換られしとか、手水鉢には水はるへからす、湯桶を斬下に出し置べし、

○月の會は、待宵、十五夜、いさよひ、立まち、臥まちと八月十八日頃まて催すなり、名月を賞翫してする茶なれは、庭の燈籠にはすべて火をともさず、曇りたる夜はすべからず、一會すみて客退出の時になりてハ、燈籠に火をさすもよし、

十興　わさかは、一日、互會、三轉、輪會、野懸、茶香服、廻點、廻炭、廻花、花寄、

○朝顔の茶は、これとおもふ蔓を前日のゆふかたに切て水に入置へし、さすれは水もよく揚り、花も翌朝こゝろよく咲なり、すべてはしめに炭をせぬ茶はなけれと、此會にかきりて初炭せず、釜をよく乾し置て、呼入直に茶たつるか、また濡釜かけ置、懐石いたすか、どちらにてもよし、時間うつりて花しほれんとせば、何時にもはなを入たるまゝ花入ともにとり入べし、しぼみては興なし、

（未完）

學園

和歌のしるべ（つゞき）

井口隆太郎

第四動詞上二段治

		結にならす	結にならす	一段の結	二段の結	三段の結
		第一段	第二段	第三段	第四段	第五段
加行	起	き	き	く	くる	くれ
佐行	掘	じ	じ	ず	ずる	ずれ

		第一段	第二段	第三段	第四段	第五段
		結にならず	結にならず	二段の結	二段の結	三段の結
多行	落	ち	ち	つ	つる	つれ
波行	戀	ひ	ひ	ふ	ふる	ふれ
麻行	恨	み	み	む	むる	むれ
夜行	報	い	い	ゆ	ゆる	ゆれ
良行	舊	り	り	る	るゝ	るれ

右に擧げたる動詞は、語尾の二段に變じ、上一段活の如く、下の二段に‖るれ‖の副りて活く故に、上二段活と云ふ、上とは下二段活に對して云ふ語なり、此の動詞は、四段活上一段活とは違ひて、一段二段三段のむすび、みな語尾の變れり、心をとめて記憶しおくべし、

圖中に擧げたる動詞は、前の如く唯一つの例を示せるのみなれば、他の動詞にして、此の圖に活くものを、聊かあげおくべし、但、佐行に活く動詞は、圖中にあげたるも

のみなり、

加行には　生く、過ぐ、盡く、和ぐ、除く、

多行には　朽つ、閉づ、懼づ、耻づ、攀づ、濡つ、諧づ、啼つ、紅づ、

波行には　忍ぶ、疎ぶ、生ふ、媚ぶ、延ぶ、荒ぶ、詫ぶ、亡ぶ、懲ぶ、奇ぶ、睦ぶ、禮ぶ、翁ぶ、赤ぶ、奮ぶ、俗ぶ、辞ぶ、伸ぶ、大人ぶ、

麻行には　浴む、恨む、試む、回む、

夜行には、老ゆ、悔ゆ、臥ゆ、

良行には　下る、懲る、

此の圖も熟讀暗記して置かざれば、實地に臨みてまがふことあるべし、

第五動詞二段活

		結にならず	結にならず	一段の結	二段の結	三段の結
		第一段	第二段	第三段	第四段	第五段
阿行	得	え	え	う	うる	うれ

	加行	佐行	多行	奈行	波行	麻行	夜行	良行	和行
	受(う)	爲(せ)	捨(す)	寢(い)	經(へ)	嚳(は)	消(き)	枯(か)	飢(う)
結にならず 第一段	け	せ	て	ね	へ	め	え	れ	ゑ
結にならず 第二段	け	せ	て	ね	へ	め	え	れ	ゑ
一段の結 第三段	く	す	つ	ぬ	ふ	む	ゆ	る	う
二段の結 第四段	くる	する	つる	ぬる	ふる	むる	ゆる	るゝ	うる
三段の結 第五段	くれ	すれ	つれ	ぬれ	ふれ	むれ	ゆれ	るれ	うれ

右に擧げたる動詞は、語尾の二段に變じ、上二段活の如く、下の二段にるれの副(そ)りて活(はたら)く故(ゆゑ)に、下二段活と云ふ、下とは上二段活に對(たい)して云ふ語なり、偖(さて)上一段、下

一段、上二段、下二段と、上下の區別をなしたるハ、五十音の順序よりしたるものなり、此の圖も上二段活と同じく、結は三段ともに語尾異なり、且、此の圖に活く動詞ハいと多ければ、殊に心して記憶しおくべし、

圖中にあげたる動詞は、前の如く唯一つの例を示せるものなれば、此の圖に活く他の動詞を、いさゝか左にあげ置くべし、但、阿行は、圖中にあげたる動詞の外に活くものなし、

加行には　開く、分く、負く、更く、曲ぐ、廣ぐ、背く、告ぐ、逃ぐ、投ぐ、擧ぐ、捧ぐ、掛く、避く、長く、燒く、

佐行には　淺す、失す、馳す、交ず、痩す、

多行には　當つ、出づ、育つ、企つ、隔つ、秀づ、立つ、惶つ、

奈行には　兼ぬ、重ぬ、連ぬ、尋ぬ、委ぬ、束ぬ、曲ぬ、

波行には　與ふ、誂ふ、應ふ、抑ふ、衰ふ、堪ふ、添ふ、比ぶ、揃ふ、考ふ、調ぶ、算ふ、延ぶ、

麻行には、赤む、崇む、暖む、改む、諫む、清む、咎む、勤む、染む、留む、止

む、屈む、極む、明む、

夜行には　肖ゆ、愈ゆ、覺ゆ、越ゆ、消ゆ、聞ゆ、絶ゆ、肥ゆ、吠ゆ、燃ゆ、見ゆ、榮ゆ、費ゆ、崩ゆ、冷ゆ、

良行には　荒る、呆る、溢る、顯る、浮る、忘る、恐る、溺る、枯る、暮る、穢る、馴る、流る、晴る、破る、折る、崩る、

和行には　植う、蹶う、居う、飢う、

此の外に猶あまたあれども、其は推して知るべきなり、

圖中に擧げたる、佐行の爲||と云ふ動詞は、下の三段活のはたらきをも、有すれば、彼と照し合せて考へわきまふべし、

此の圖も、前の如く熟讀暗記して置かざれば、實地に運用するとき、大にまどふことあるべし、

（未完）

百人一首和歌の解（つゞき）

井口隆太郎

藤原興風

誰をかもしる人にせむ高砂のまつもむかしの友ならなくに

もうこんなに年をへた上は、昔の事を知つて居る人も、なくなつてしまつたから、今よりは、だれをしる人にはしやうか、いろ〳〵考へては見るけれども、どうもしる人にする人がない、しかたがないから、あの高砂の松は、餘程古くからあると聞いて居るゆゑ、あの松をしる人に仕様と思ふけれども、あの松も矢張むかしの友ではない、あのふるい松でさへ、昔の友でないから、其の外の人などは、とてもしる人にするものはあるまい、

誰をかもの、かもは、たゞかと云ふ疑問の辭に、もと云ふ辭をそへたるなり、友ならなくには、友にあらぬと云ふこゝろなり、上の二句の、誰をかもしる人にせんを、この句の下におきて見れば、この歌のこゝろあきらかなるべし、

紀貫之

人はいざ心もしらずふるさとは花ぞむかしの香ににほひける

人の心は、今も昔のとほりに、かはらずして有るかしらん、どうぢややら知ることはできぬが、今此の故郷に來て見ると、梅の花は昔にかはらず、いかにもゆかし

きかをりに、にはつて居る、この花のとほりに、人の心も變らぬものならば、よいけれども、人の心は、時々にうつりかはるものなれば、どうも覺束ないことである、

人はいざの、いざは、俗にどうぢややらと云ふ意なり、

清原深養父

夏の夜はまだよひながらあけぬるを雲のいづこに月やどるらむ

夏の夜は、暮るかと思ふと、すぐに明ける、丸でマーダよひの内ながら、あける様であるから、空を行く所の月は、雲の何所に宿をとりて、とまるであろう、出るかと思ふと、すぐに夜があけるから、月は宿をとつてやどる所もあるまい、さてもく\みドかい夜ではあるわい、

文屋朝康

しら露に風のふきしく秋の野はつらぬきとめぬ玉ぞちりける

見はたすかぎり、草の葉ごとに、一ぱい白い露がおきはたしてある、其の白露に、風がさつとふいてきて、一面にしきわたる、秋の野を見ると、露が丸で玉のやう

に見えて、丁度、貫きとめすして、ちらばつて居るところの玉が、散るやうである、實の玉ならば、貫きとめておくべきなれども、これは白露であるから、ぬきとむる譯にも行かぬが、どうも實に善いけしきてある、

つらぬきとめぬ玉ぞちりけるとは、白露を其のまゝ、まことの白玉に見なしてよみたるなり、

右近

わすらるゝ身をはおもはずちかひてし人のいのちのをしくも有かな

自分の思ふ人からは、もはや、遠に、自分の事は忘れられて居るけれども、自分は矢張其の人の事のみ思うて、忘れられて居る我が身の事は少しも思はす、唯一心に行く末長く誓つて置いた所の、人のことばかり思つて、どうか其の人はいく久しく、無事にして生きながらへ居られたいものてあると、其の人の命がをしく有ることてあるわい、

參議等

あさぢふのを野のしの原しのぶれどあまりてなどか人の戀しき

どうも戀といふものは、仕方がないものであつて、もう決して、戀と云ふものはするまいと思つて、しのびこらへて居るけれども、どうしてもこらへきれず、前よりは一層ひどく戀しく思はるゝ、これはどう云ふわけであるかしらんが、まあどうしてこんなに人がこひしく有るだろう、

あさぢふのは、野と云ふ枕辭にて、淺茅生といふこゝろなり、小野のしの原とは、をはたゞそへたる詞にて、野の篠原と云ふこゝろなり、篠原とは小き竹の生へて居る野原のことなり、此のしの原といふ詞のしのと、しのぶのしのと、同じ詞なるをもて、三の句のしのぶれどと云ふことをいはむために、上二句は詞おもしろくつゞけたる序詞なり、故に上二句は、一首の歌の意には關係なし、

漫錄

清少納言（承前）

小野利三郎

清少納言の感情の微妙、思想の富贍なりしは、今更いふべきものあらねど、當時歌人として名譽ありし公任の君に、すこし春ある心地こそすれと詠

みかけられ直に、そらさむみ花にまがへて散る雪にと上句をつけたるなど、殿上人をして奏請して内侍になさんと決議せしまでに感激せしめたり。續世繼初春の巻にも、肥後守元輔と申すが女清少納言とて、ことになさけある人に侍りなど見ゑたり。斯く詩歌の道にはありがたき天授を享けながら、その詠歌の少き、世に流布せる納言の家集といへるにも、僅に貳拾餘首記載せられたるのみなり。甚だいぶかしきことの如くなれど、これには理由あり。蓋し納言の親に孝なりしよりなり。納言は常に父即ち梨壺五歌仙の一人なる元輔の名聲をおとさんことを恐れき。されば已むを得ざるにあらざる外はあまり詠まざりしなり。枕草子に

(前略)何かこの歌總て詠み侍らじとなんおもひ侍る物を。ものヽ折など人のよみ侍るにもよめなどおほせらるれば、得候ふまじき心地なんし侍る。いかでかは、文字の數知らず、春は冬の歌をよみ、秋は春のを詠み、梅の折は菊などをよむことは侍らん。されど歌よむとはいはれ侍りし末々は少し人にまさりて其折の歌はこれこそありけれ。さはいへど、それが子なればなどいはれたらんこそ甲斐ある心地し侍らめ、露とりわきたる方もなくてさすがに歌がましく、我はと思へるさまにいと初によみいで侍らなん。亡き人のためいとほしく侍るなどまめやかに啓すれば笑はせ給ひて、さらば唯心にまかせ、我は詠めともいはじとのたまはすれば、いと心やすくなり侍りぬ云々、今宵はよめなどせめさせ

給へど、けぎよう聞きもいれで候ふに、他人ども詠いだしてよしあしなどさだめらるゝ程に。いさゝかなる御文をかきて賜はせたり。あけ見れば、

元輔の後といはるゝ君しもや今宵のうたにははづれてはをる

とあるを見るに、おかしき事ぞたぐひなきや。いみじく笑へば、何事ぞ何事ぞと大臣ものたまふ。

その人の後といはれぬ身なりせば、今宵のうたはまづぞよまゝし

つゝむ事候はずは千歌なりとも是よりぞ出でまうでこましと啓しつ

（未完）

楠公家訓（承前）　綠園主人

足る事をしりて、及ばぬことをおもふな。

綠園云、人に貴賤あり。貧富あり。上下あり。各其の處によりて安せざるべからず。人の美服を着たるをうらやみ、人の美味を食するを望む、豈盡くる所あらんや。弊衣をまとひ疎食をして、漸く今日を暮す貧民を見ば、轉己の地位の低からざるを知るべきなり。彼の兼好法師は、衣食住醫の四つ欠げざるを富めりとす。此の四の外を求むるを奢とす。四の事儉約ならば、いづれの人か足らずとせん、といへり。貴賤、貧富、上下の區別を知り、自其の分に安せば、如何なる人と雖も不足なる事あるべからず。然るに猥りに人の富貴を羨み、己の不足をかこつ者は、

己を知らざるものと云ふべきなり。

忠に安して、死をわするゝことなかれ。

緑園云、子たる者は、父の爲に死を以て事へさるべからず。臣たる者は、君の爲に死を以て事ふへきなり。君父の恩によりて、生息する臣子なれば、君父のために死するは、理の當に然るへきなり。然れども死するに處あり。生るに道あり。諺に曰く、死する時に死なされば、死ぬるにまさる愧ありと、故に生死其の宜しきを得ざれば、或は犬死の譏を免るゝこと能はざるに至る。然らは何を以て生き。何を以て死す、曰く、唯一の忠のみ。忠と共に生死せば、何の處か宜からさらん。湊川の沒、四條畷の死の如きこれなり。わがせこは物なおもひそ事しあらば火にも水にも我なけなくに」

身の爲に備ふる金銀をためむより、借財をするな。

緑園云、金銀は人の一進一退に要する所のものにて、實に必要なるものなり。されども己の爲に備ふる金銀を貯へんと欲する時は、おのづから不道徳なる行もあり、輕薄なる振舞もあるものなり。故に人の毀譽褒貶の分るゝ所は、おほく此の金銀にあり。今の社會の有様を見ても明なるべし。高利貸、其の他自己の爲のみに、金銀を貯へんと欲する者は、誰にても蛇蝎の如く思はざるはなし。故に金銀をたむることを志ざすよりも、寧ろ借財をせざる樣心がけざるべからず。借財は管鮑の交をも破り、姻親の中をも裂く。且借財せざれば、其の身おのづから心廣く、

體胖なり。此の如くして、萬の幸福自然に集り來る。「見渡せば柳さくらをこきまぜて都ぞ春のさかりなりける」

舌は柔なる德によりて長く保ち、齒はこはき咎ありてはやく落つ。

絲園云、諺に柳に風をれなしといへり。柔和なれば、物にさからはず、したがひゆく故人の怒を招かず、人の恨を受けず、すべての事物皆圓滑にして、成就すること容易なり。之に反して剛健なるときは、物にさかひ爭を生じ、事を敗る、故に古人道を立つるに温厚恭儉を以てせり。恰舌の柔かにして、物に抵抗せざる德によりて、長くたもち、齒の剛堅にして、物に抵抗する咎あるによりて、早く墜つると同じことなるべし。

（つゞく）

貞烈鑑

海鶴仙史

藤井懶齋の壺の石ぶみにも。此の栗女の事によく似よりたる物語。一條をのせたり。文ながければ今その畧をあげんに。延寶年中武藏國とね川といふ所に住みける。小澤氏といふ人。松といふむすめをもてり。十七のとし。おなじわたりの野口氏といふ人にめあはす。野口が父母天然の後。男不幸にして癩になりにけり。女これを深くなげき。神に祈り佛に念じ。藥を用ゐさまぐ\いたはるといへども。いかなる天の咎めにや。しるしもなく。次第に重りて。およびかゞまり。足なへてうごく事かなはず。床にのみ起き臥したり。されバ病を

うけてより。いとなむ産も失ひけれバ。ある程ハ田畑をうり。小袖を粮の代として。月日をおくりしが。それも續かず。後は家をも賣りたれバ。住むべきよすがさへなくて。とね川の寒き川風にふかれ。嵐にもまるゝ呉竹を折りかけて。峯の木の葉籠の野べの草を結ひ。やう〳〵庵をしつらひて。夫婦小篠の露に袖を濡し。涙の雫ハ川の水と流れ。泣く〳〵も夫をなむかへり見し。家をもうりて後は。世わたるたづきわらざれバ。女はみづから。ならハざる荒布の衣に。なはの帶して。たすきといふ物をかけ。川より向ふの里に日毎に通ひ。よねふるひ。水いたゞき。ならはぬ業に身をやつし。一日の勞をわしにかへて。夕にはいほりに歸り。夫のため食となして。これを進め。たま〳〵も人

のなさけありて。うまきを贈れバ。われハ食はで。夫に進めけり。五月雨夕立などするころ。をちの里に。なりはひのため行きて。川の水まさり。夜にいりてわが宿に歸らん事もかなはドと思ふに。人はなさけありて。今よひは。こゝになどいへど。病夫も心もとなく。又はわが身をいさぎよくせんとにやわらん。身も袖もひとつにぬるれど。川をわたりて歸りて。一夜もそとにいぬるとなし。野口ある時。女に向ひていひけるは。われこそかゝる身となれ。そこはなどわれゆゑにあさましき目を見せむや。父母のためも耻辱なれバ。里にかへり。いかなる人にもあひなれて。行末めでたきあり様をきかバ。さてこそうれしからめといへバ。女はうつくしう笑ひて。つれなき人のことばかな。千

代とかねたる夫のあしき病ひうけ給ひ。今かくあさましくなり給ひし程にとて。それを見捨てゝ。又富貴なる人に嫁せんや。世にある時のみが夫婦にて。かく衰へたる時は夫婦ならずや。君つゝがなくてわれ病をうけば捨て給はむや。返す〱情なき人の心かなといへば。野口涙を押へ。此上はともかくも心に任せ給へといへば。女も喜び。いよ〱勞りけり。とかうして野口十とせばかり病みて。遂に死にければ。深くなげきて。野邊の烟となし。夫の爲めに。三年がうち同ド庵に籠り居て。夫のことをなげきつゝ。其身も遂に身まかりしとなり。

物につけ事にふれて。貧くいやしきを憎みて。富みさかへたるを好み。心の善惡。才の長短をとはで。たゞかたち姿の美醜をのみあげつらふは。なべての人情なれど。なかにも女には。此の病ことにおほくして。なか〱に癩などいへるあしき病にもまされり。されば前にあげたる。栗女松女のごときは。千萬人中の一人とも稱すべき貞女烈婦にして。なみ〱の女に。かゝる行の寸分だもあらんことを望むは。洵にかたきことなれど。試に思ふべし。夫婦は松女のいひけんごとく。世にある時のみが夫婦にて。衰へたる時は夫婦ならずや。夫つゝがなくて。をのれ病をうけたらんときは。いかにぞや。貧富貴賤は家を擇ばず。天壽死生は人を選ばず。つゝしみ畏れざるべけんや。故に人の妻たるものは。夫の貧富貴賤を。たゞちにをのれの貧富貴賤となし。夫の天壽死生を。たゞちに

をのれの天壽死生となして。わしたに呉客を送りて。夕に越人を迎ふること。娼婦のごとくすべからざるなり。

千代の春草　　忍の舎主人

此の一篇は、上杉治憲卿の孫増姫、其生母屋代の方文化二年卒去の後、三の丸の奥方へ引取り養育せらるゝ事に定まりし時、その御附の女中に示し給ひしものなり、世の中には明治以前といへば、全く野蛮未開の世にて、教育の事なとは夢にもなかりし如く思ふものもあるべけれど、この篇を讀みゆくに、今の開明世界こそ中々に面伏なる心ちせられて開けゆく今の御代こそ中々に開けぬ代々にはちずわらめや

文化二年、増姫生母於屋代の方卒去後、三の丸御奥へ御引取のうへ、御附女中へ御示し、

今それ若草の萌え出るは、自然と春陽の朗かなる氣、土中にみちて、發生の時に感じて若芽を出し、夫より東風のそよ吹に動かされ、春雨のしとふるに潤され、長閑き日影に照されて、目には見えねど日に増し月に添て生立つ、其處へその時々、程よく人の力もて養ひ立つれば、見事己々が禀得し天性を成就して、花咲き實るものぞかし、若しその生出でたる初に、あらき風に吹き靡かされ、強き雨に打ちたたかれ、烈しき日影に照され、きびしき霜に逢ひ、また人の手入れ養ひも、その程を過せば、その天然の生氣折け、やけ枯て、終にそ

の形もゆがみまがり、生立ちし後も見よからず、麗しき花も咲き出ぬものぞかし、人も亦天地のあひだの一物なれば、この天地の氣に感じて成長し、人となる事はおなじ道理ぞかし、たゞし物は天地の偏なる氣を享け、人は天地の正氣をうけ得しものなれば、成長の後、智惡分別も、諸物とは格別にて、天地もこの人の力を借り得ねば、化育の功もとゞかぬところ有る故に、天地にならべて三才とも稱し、萬物の靈とも云ふぞかし、されど生れいでしその始は、むご〱したる計りにて、乳をのむ事の外は、辨へたる事もあらざれども、父母のいとをしみ生育に養はれて成長し、人とも成るものぞかし、されば其の父母の養育か即ち草木の雨露の惠みなるぞかし、其の雨露の養ひ手入れの仕かたよければ、見事に生立ち、其の雨露の養ひ手入れの仕かたあしければ、見ぐるしくかぢけて生立つなり、其の雨露の養ひ手入れの仕かたといふは、則、東風をそよ吹せ、春雨をしとふらせ、日影を長閑に照させ、養を時に先だゝず後れず程よくする事なり、その東風をそよ吹せ、春雨をしとふらせ、日影をのどかに照さんは、いかゞする事ぞといふに、皆是けふのうへ事々物々にありて、其子を取扱ふに物靜にして、先我心を潔し、柔和を專とし、心の內に一物を貯へず、有のまゝにして、立居、振舞しとやかなるが即ち其の子にあたる東風、其子を潤す春雨、其子を照す日影なるなり、夫よりして飲食、衣服、朝夕の調度までみなよろしきに適ひて過不及なく、其時々

に隨ふべきなり、風をいとひて風よけが厚ければ、むせて枯るゝの變わり、雨を凌いで雨除が多ければ燥ていたみ、日をさけて日よけは大なれば、色つやのなきが如し、只其の風も雨も日影も程よく受しめて、其時々の手こゝを入るへき事ぞかし、まして女子の育は、心づく迄もしとやかに、もの和かなるぞいとをしきものなる、是等みな成長の後にこそと思ふものなれど、一尺の草も一丈の木も、土を穿ちていづるそのはじめより養ずして、一尺一丈の後、花實を得べきそのときに臨みて、俄に手をいれ、枝などたむれば、木勢いたみて其の天性を失ひ、快く花實は結ばざるものぞかし、人も幼少の内捨て置、其年比に至りて、やれそれと世話し敎ふるとも、其はとめわろき僻ついては屆かぬものぞかし、敎育は其の始におりて、おでてん〱とゝのめ〱といふこそ、百年の後迄の基なれ、されば易といへる書に蒙以養レ正とあり、蒙とは物をかふりたるをいふ、物をかふりては、目も見えず、耳もきこえぬなり、夫れよりして、童の何の辨別もなきを譬へて蒙とは云なり、その何の辨別なき内より、邪ならぬ正しき道に導けば、骨折らずして、成長の後も、正しき人となるといふことになん、其辨別もなきを諭し導くは、詞もて敎ふべきにあらず、其の取扱をもて感通することなり、それ物の感通ほど妙なるものはなきなり、猫をすく人の側へは、知らぬ人とても自然と寄り添ひ、嫌ふ人の側へは寄りつかぬものにて、捕る心なき人の傍には鳥驚かず、取る

心有る人にハ間遠く隔たれど、たちまち飛去るなり、是れ人と鳥獸の上だに、感通の理は免れず、況や人と人とのうへをや、耳目の及ばざる所に、感通の理は有ぞかし、今度於増殿手許にて養育のことなれば、今日のうへよりの取扱こそ大事なれ、いまだ一切の幼稚なるに何の事々敷、無用の辨に似たれども、教育といふは、生れ出るよりはじめて、一日もかけて叶はぬ事にて、段々と成長に隨ひて、其時々の教かた、育てかたも有とぞかし、先々今日の上は、朝夕の取扱を、いかにもやかましくなく、事靜かに物和らかにして、其附添扱ふ人々互に能和合し馴合、於増殿の側へ寄るときは、先我心を和にして、自己のうへを愼むこそ、始にいへるそよ吹く東風、しとふる春雨なれ、知らず〳〵の內に、いつしか感通の理有りて、先へは入ぞかし、まして乳など參らする折には、必しも心中を平にして、潔き心もて參らすべき事なり、たゞ何事も春の日のうらゝかなるに、悠々たる心持こそあらまほしけれ、是今の上の教養にて、迂遠なる事に似たれども、かくそだて置ねば、末に見事なる花實は得られぬ事にて、肝要なる事ぞかし、物ハはじめを愼まざれば終りを全しがたき故に理屈らしき事ながら千年のけふを始めとし、此の心得をみな人に言知らするものならし、

書籍をなほざりに讀む人の事

この一くだりは、平田篤胤翁の隨筆伊吹舍筆叢にしるされたるものなるが、姫等の心

得にもとて貴社にまゐらす、餘白に載せさせ給はゞ幸にこそ

敎の舍主人

我が學のいろせなる、堤朝風のもとに、或人の來りて、何くれの物語しけるついでに、朝風の、玉がつま、初若菜の卷に、人にかりたる本に、既によみたるさかひに、をりめつくるは、いと心なきしわざなり、本にをりめつけたるは、なほるよなきものぞかしと、云はれし條をとりいで、これ見給へ、人に書かりたらむには、かくこそ心つくべきわざにはあむなれ、いとめでたき敎へ言には、はべらぬかとて、見せられたるに、其人甚く感じて、いかにも、これいとよき敎になむはべる、直に此卷を、我にかし給はれかし、忘れぬ間に書ぬきはべらむと、云ひさま、そこを二重にをりかゞめて、ふところにねぢこみて、歸りぬとぞ、朝風も、甚くあきれたりしとて、かくと物がたりせられき、世によき事を聞きて、めでたしと思はぬ人もなけれども、なほざりに思ふから、かうやうのしわざもあるなりけり、誠に書は、一ひらよりは二ひら、ふたひらよりは三ひらと、よむがまに〳〵力を得て、いとめでたく、尊きものなるを、なほざりにするなむどは、學問する者の、いとあるまじき事なり、法師どもの、書をもてあつかふを見るに、かりそめにも、直にむしろに置く事なく、机におきて、いつもいたゞき讀むなむどにも、恥づべき事なり、まして、人に借りたる書なむどは、いかにも〳〵、あしくならぬやうにと、心しらひ

して、みたりには、すさまじき事なり、さるは藏書家といはるゝきはの人々こそ、書うる事も、心やすかめれども、我どもがらの如く、はかなくまづしきものゝ、書を藏めおく事は、眞にくゝ難きわざにて、殊に皇國の書は、板に彫れるが、少くなむどして、漢籍よりはこよなう得がたきを、辛うして得たるを、心なくみだりに扱はれたるは、いとこゝろなく、口をしきものなるを、さる事にも心つかで、物にさへ包ます、ふところに押入れ、また讀みたるさかひに、をりめつけて、返すなむど、其人の心さへ、おしはからるゝ心ちして、いとあぢきなきわざなりかし、かくいはゞ、己をいと吝と云ふ人もあらむか、然る人はいかにともいへ、すべて、ものはかゝる少き事より心せずれ、えあるまじき事なり、これらの事ども、朝風の、からやまとの書に見えたるを書あつめて、讀書用意と名づけて一卷あり、志あつからむ人は乞ひて見るべし

少女の問答

ささくさのや

牛込の、ある閑靜なる街に、毛糸の編物を教ふる家あり。先つ頃、其の家の男あるじに、物はかることありて、音信れぬ。折しも、十一二ばかりなる少女等、七八人も寄り居て、糸編みつゝ、種々の物語をさへすめり。ふすま一重を隔てゝ、應接の間に待ち居て聞くに、はかなき事、可笑しき事ども、何くれと語りつゞけ言ひつゝくる、總べて耳にも止まらざりしに、一人が言ふ、「何ぬしよ。

此度の日曜には、妾と共に耶蘇には行き給はずや。錢は出さでも、櫛、かざし、書物、紙、筆など多く賜はるに。これ見給へ。妾が此のかざしも、前の日曜に、女教師の賜び給ひしなり」とて、頭をば前方に差し出したるめり。小兒らしき女兒よ。教の育の善惡はさておきて、物くるゝにめでゝ通ひ行くは、さるにても、問はれし者は如何なる答をかすらむ。同じく物欲し盛の少女なり。飛び立つばかり喜びて、「さらばよ。必連れ行き給へ」などいはむは、極まりし事ならめど、然言いむてとの口惜しと思ふ心には、若はなど、少しそらだのめさへせらるれば、耳うちすましつゝ聞くに、「ことわりや。如何にも美しきかざしかな」と言ひて、暫しは言の葉もなし。うちながむるなめり。

さては賴みし甲斐こそ無かりけれと、先興ざめて、いと淺ましく覺ゆるに、やがて、言葉鋭に、「されど妾は否ぞ」と答ふ。この案の外なる言の葉は、屈れたりし聞者に、一層の勇氣を起させつ。先の女子は、あはたゞしく、「そは何故に」と問ふ。「物賜はるゝ嬉しき樣なれど、耶蘇に入れば、佛樣をば拜ませずて、打ち碎かすときく。佛樣をち碎くは、父母をふみつくる。。。。（原語のまゝ）も同じことなり。その樣なる事、いかで〳〵妾が爲し得べきぞ」と、身ぶるひをさへして言ふめり。既く父母を失へるものなるべし。傍の一人二人も贊成つに、先の女子は口を閉しぬ。よくもいひ出でたりやと、いと嬉しくて、窺見もしつべく思ふ折しも、主人出て來りぬ。用の事ども言ひ了へて立

ち出づる頃には、かの少女等も皆歸り去りぬ。名を聞かざりしこそ口惜しかりけれ。偶像を拜む事の、よしや惡しやなどいふ、こちたき理論は、兎まれ角まれ。させる教育を受けしとも思はれぬ少女子が、義の爲に利を棄てたりし心根のゆかしさよ。身の爲には國をも家をも忘れ、利の爲には君をも親をも顧みざる輩多き世の中に、

楢の舍歌がたり（つゞき）

富田馬太

森正繩が郭公の歌

正繩は讃岐櫛梨の人なり。點茶挿花など風雅の方には、何事によらず通ぜずといふことなし。和學は秋山某の弟子なれど、左迄深からず。よみ口に至りては、折々ごとの吟詠、金玉の聲をあやつらずといふことなし。其處より程近き琴平には、常陸人水野秋彦とて、歴史法制は言ふに及ばず、敷島の道の奧處をきはめ、和歌の浦にひとり月を眺むる學者あり。すき人共をあつめて歌會を催さるゝに、或時の事なり、當坐の題に、郭公といふを出さる。正繩がやがて、牛ひきてかげ三日月の入間川みゝあらはんとやなくほとゝぎすといふ、は其調甚高く、その意甚面白しとて、秋彦手を拍ちて、都人に聞かせんには、如何に驚かざらんやはとて、頻に賞歎せらる。實に之はなか〱よく詠みつゞけられたり。哥人といはるゝ程の者にても、かう迄やすらかに浮べらるべきかは、よしやあしやは。都人の批評にまかすべし。題を設けて

歌よまんことは、虚僞に流るゝ嫌なきにあらねど、一圖に咎むべきにあらず。これ歌の本領はいつも實在と感情とをあらはすとに限られざればなり。京都の聚樂にて歌會の時、雨中時鳥を木下勝俊がよめる、雨になく佐野のわたりのほとゝぎすぬれもやどれるかけやなからんといふを、細川幽齋が評して、この歌よろし。但都の會にては、他國の名所をばよむことなし。又佐野のわたり、時鳥をよみたるも知らずと云へり。讃岐にて武藏のこと如何あらん、と指さす人も有らんか、なれども幽齋の議論は甚片寄りたるものなり。

定家と景樹との見識

藤原定家は中古の歌人なり。香川景樹は近世の歌人なり。されどこの二人が、歌につきて懐きし見識は、全く相異れり、定家は、情は新しきをよしと爲し、詞は舊きを用べしと思ひしなり。萬葉集よりこなた千載の頃まで、凡八代集の間にて、(今假に萬葉集を勅撰と見なして云ふ)世界の事物は、こと〴〵く既歌の題目となり、尠よみふるされたれば、徒に古人の糟粕を甞めんことを快く思はれざりしならん。これ情新しきをよしとせられし所以なるべし。言語は、世を經るにしたがひて、種々に遷り變はるものにて、何時も同様なる少數のものゝみに止まるべきにあらぬを、今をいやしめ、古を尊むの僻心より、舊物を守るは、大方の迷なりしなり。これ詞は舊きを用べしと思はれし理由なるべし。されば定家が歌は、稍斬新なることを詠みながらも、詞はふるめかしきなり。景樹は

之と異り、詞を今にして、意を古にせるなり、言ひ換ふれば、後代に在りながらも、古人の感情想像を寫されしものなり。これぞの近世の歌人と、持て囃さるゝ價値の備はる所ならずばあるべからず。この人に至つて、實に始めて言語の活物なるを悟られしものなり。斯の如く、この二人の見識は、全く相異れど、共に歌に巧なりしは相違なかるべきなり。されど、何れも長歌は、よみ得られざりしは惜しむべきことなり。それ情新しきを以てよしとせんか、百事日新の今の世の中には、西洋の究理說をかつぎ出だして、漫に理屈を以て主となす歌も出で來べし。歌よまんと思ふ者は、常に景樹の心を心として、別に長篇の再興を計り、明治の萬葉集を作り出されん事こそ望ましけれ。

（つゞく）

（前回の正誤、僧契仲の段堂上よは歌よみ多しは多からぬの誤也）

あらひはり

笠雪子

第一回

花のお江戸に參勤交代せらるゝ諸國の大小名を警護する武士ども、箱根山をうちこえて一息つき。關東は是よりなり、いざ、一夜の宿をかりて旅の疲勞をやすめん、と立ち寄るもの數を知らず。市街自から繁昌して東海道五十三驛の其中にても、名に





おふ相州の小田原驛、星移り物換りて今日となりては、商賣もはか〱しからず、むかしの輿丁今の漁父。やくや藻しほの煙いと細き家に人となりたる娘お花。今年十七の娘ざかり、衣服櫛簪など流行に後れじと心を痛め、物見遊山にも先を競ふ年頃なるに、生れが生れなれば、襟一つ買ふにも如何ばかりの心配何も不足がちにて其日〱を送るのみにて、おもしろしといふこと少し。晝は苧をうみ貝を拾ひ、夜は網の目の破れたるを繕ひ、着物の綻びたるを縫ふをそのつとめとして、只管親の手たすけをなして、其心を慰め、ならずながらも弟を學校に通はせけり。

一日東京より商人体の男來りてお花が兩親に向ひ、日ごろ御依頼になりしお花どのゝ奉公さき、こゝかしこさがせしかど、思はしき處あらざりしが、此度下谷によき御屋敷を見出しぬ。旦那は官員様にて御家族も少し。我も度々出入して御家風も一通り知りぬ。あの御屋敷ならばお花どのに取りてあしくはあるまじ。いよ〱御承知とあらば明日お花どのを連れ行かん。といふを打ち聞き夫婦口を揃へて。あり難し、かたじけなし。お花今の談話をきゝしならん。明日とは言はじ唯今仕度せよ。さて客人に一杯献げん今朝獲たる松魚を下物にして。といふ喜悅の色を見て取りお花

嬉しく、早々に燗つけてさし出せば、男も辭せず三四杯をのみほして立ちあがり。今より用事ありて湯元までゆかねばならず。明日晝頃此處に來るべければ、お花どのそれまでに仕度を、と薄醉の心地よく立ちいでぬ。

今夜枕をはづして鬢の壞れてはと思へども、明日にては遲くなりもやせんと、お花晩方に島田髷に結ひ湯に入りてさて身たしなみの薄化粧。世間の娘には尋常の事なれどもこの子にとりてはいと珍らし。

平生懇意にする隣家の戶をくゞり。伯母さん御在宿かと音づるれば、四十前後の色黑き嚊つく〴〵とお花を見て。何處の奇麗なる娘子かと思へばお花どのにてありけるよな。御祭禮でもなきに是は何事。定めて御めでたきこと今夜あるべし。隣家の私に今が今までかくしたてとは聞えませぬ。婿殿は誰なるぞ、聞きたし〳〵。と問ひかけられ直にそれと言はれぬが娘氣。お花しばし躊躇ひしが、かくてあるべきにあらざれば。優しき聲にて。御暇乞ひに參りました。後を言はせず、輕口の嚊笑ひつゝ。さてこそ推量の通りなれ。御嫁入りさきはどこ〳〵。アレマー伯母さんの御戯言ばかり。嫁入りなどとは思ひもよらず。といひながら微笑みて、あがりかまちに

腰をかけ。此度兩親と相談の上東京へ奉公に出る事となり、明日出立ときはまりぬ。後はよろしく御賴み申します。それはよき仕合せなり。其御標致を水道の水とやら、玉川の流れとやらにて磨きたてられなば、さぞや奇麗になられん。江戸子の意氣な人に思ひつかれて、この腥くてきたなき處には二度とは來らるまじ。お花羞ぢて。またしても伯母さんの御戯言、モーよして下され。其翌日、男湯元より來りてお花をつれて東京へたつとき、母は戸口まで見送りて、鳥渡待てとよびもどし。鬢の後毛かきあげて、衣紋つくらうてやるも親心ぞかし。

文林

幽栖春月　　東久世通禧

おとつれてくる人もなきわかかとの
　柳のいとに月はかゝりぬ

世治文事與　　黑田　清綱

わた波のひゝきは絶えてもしはくさ
　しけりゆく世になりにけるかな

歳暮鳥　　稻葉　正邦

鳥すらも年のくるゝをしりかはに

ねくらいそきてかへり行く見ゆ

水鳥　税所　敦子

一つかひ並ひてをしの行く見れは
水のうへにも道はありけり

都元旦　三上　一彦

松竹の千代たのもしく見ゆるかな
年もみやこの名にや立つらん

女鑑　久萬　直澄

ひめかゝみ寫さんものは姿より
おのかこゝろの影にそありける

節女阿政　西島　種美

誓ひてし心もおもき小夜衣
かろきは露の命なりけん

楠正行母　佐々　豊水

たらちねの母のをしへはときしくに
香の木のみのかくはしきかな

松　花井　卻禪

とめくりもありといふなる神垣の
松こそ千代の姿なりけれ

領巾麾之嶺懷古　師岡　正胤

語繼言つき來らく　言さへく任那の國ゆ
新羅の叛くを討と　官軍を乞願しかハ
天下撰ひたまひて　つかはさる八十伴雄の
とりよそひ出立時に　大伴の益荒健雄は
妻別れ悲しくはあれと　天皇の命かしこみ
朝ひらき船出しせは　松浦潟佐用姫の兒は
常ならぬ旅の別と　をしみつゝ袖泣ぬらし

咽つゝはひまつはれと　止むへきよしの無れば
立出るかげたにみむと　こき出る舟たに見むと
足曳の高嶺に登り　綿津海の海路をみれは
浪のまを行きさくゝみ　雲井なす遠くへなりて
吹風の見えすなりぬれ　こひ轉ひさけひ袖ふり
立はしり足ずりしつゝ　招とも船は歸らす
よはへとも聲は聞えす　歎にこゝろきぬうせ
おもひに命死にける　松浦潟佐用媛の兒か
遠世にひれふりきてふ　山そこの山

貧女吟

本朝文粹　紀納言作　意譯

菅喜田和三郎

軒はかたふき壁はおち　門はむぐらの生しけり
いふせき宿に病ふして　憂にしづむ女わり
今の昔をたづねれば　七重かくめる窓のもと
八重に疊める床の上　數多の侍女に給仕かれ
秋の夕も春の日も　月と花とにくらしつゝ
たゞ自らのいとなみは　裝ひをこらす外ぞなき
蕾める花に露ちりて　いつの風にか綻ろびん
眞玉のかざし月のまゆ　巫山の雲をや眺らむ」
ほのめき見る好色家は　門の柳に駒つなぎ
小河の岸に舟よせて　垣間見するも多かりき
ついぢを通ふ月の夜半　人目をしのぶ花のには
しめゆひはへし女郎花　手折らんとてや朝夕に
音なふもの丶絶ざれば　千草亂れし秋の野邊
男花やいづら父母の　思まとふもことわりや
ほにいでまねく花薄　心のそこは見えねども
都の公子の名にめで丶　遂に處女を嫁がせつ」

駒にむちうつ春の野邊　鷹におはすの秋の山
昨日も今日も倦がれて　あだに月日を送るなり
家にし在ば夜なく／＼に　友を會へてさかみつき
はじしはつみて林なし　酒はたゝへて池なせり
雲の通路ふきとぢて　天つをとめも侍るめり
八重の潮路を堰とめて　龍宮美女も侍るめり
舞ふ手にかざす扇には　いかなる人も靡くべく
かなづる琴の調べには　いかなる心も引らむ」
あだなる色香に身を沈　千代を一夜に醉わかす
その樂みもいつしかに　盡くる習ひぞ術もなき
父祖の遺物の財さへ　つくしはてゝは今更に
まよひの夢の雲はれて　悔ど甲斐はなかりけり
親戚故舊もかへりみず　たのむ木陰に雨もれば
我身一つをおきかねて　獨り旅路にいでたちぬ

何處をはかとも定なく　世を故郷をおとに見て
おもひ捨てたる心には　如何なる夢をか結らむ
思へば今の吾が身ほど　はかなき者の又やある
父と母とはみまかりて　恃めし人にも棄られぬ
兄一人は北の空　妹一人は西のはて
言傳やらん術もなく　音れとてもなかりけり
梶をたえたる捨小舟　友に離れし島千鳥
何處によらん方もなく　鳴より外はなかりけり
今はた同じわびぬれば　今日を限りの命とも
思にまかせぬ習ひこそ　しぬるにまして苦けれ
折しも秋の末つ方　軒におとなふ村時雨
したゝる音を聞てすら　まづぞひぢぬる吾が袂
柴の編戸に身をよせて　我夫いづらと呼へども
木末をわたる秋風の　聲より外に聲はなし

夜のころもを反しつゝ　ぬる夜の數はいつもれ共
枕にくらき燈火の　影より外に影はなし
今は思ひにたへかねて　病の床にしづみけり
鳴や霜夜のきり〲す　夜毎に聲のよわるなる
憂が中にもありへにし　糧の代さへつきはてゝ
さらぬも細き玉の緒の　愈絶ゆべくなりにけり
重き枕をもたげつゝ　匣の鏡とりいだし
寫せばあやしわが影は　此世の人には似も遣ず
髪はおどろに色青く　まなこ凹みて骨たてり
いつの人間に形かへて　我身は鬼となりぬらん
十年あまりのその昔　かゝる姿のうつりきや
かひなき夫に嫁ぎしぞ　今は中々うらめしき」

すまの友（承前）　何たに子

四日　天氣よし。昨日のつかれにて朝いしたり。東京よりきしをりにくらふれは、わつかの道のりなれと、東海道と違て鐵道のわろきためにやあらん。あまりにゆられてこしなといためは、今日はいたつらにくらしつ。

五日　天氣よし。けふは曆舊の廿五日とて、すま寺の弘法大師へ、大坂神戸より參るものおほしときゝて、家人つれたちて參る。こゝかしこに接待茶屋をまふけて、餅なとほとこすあり。山のうへの八十八ヶ所をめくる。けはしき坂道にて、そのうへ砂地なれは足のとゝまらてする〲とすへりおちさうなれは、たかひに手をとりて、かさをもさゝされはあつさたへかたし。寺にはあつもりの首塚、青葉の笛、初陣のよろひなといふ寶物あり。

こゝにも相生の松あり。枝葉茂りて、みどりの色うつくし。これをみるにつけても、昔はよき寺にてありしならんとおもふ。

すみ染の袖も露けくおもふらん
　松の雫のかゝるすま寺

すまのせきのあとはおぼろけなり

さよちどりあはちへ通ふ聲のみは
　今もきくらんすまのさと人

六日　天氣よし。朝けはつるころ、松田周次ぬし來玉ふ。鐵道見まはりのため、昨日すまへ來たられしよし。あとより野田氏も來ましゝかばつれたちてかへり玉ひぬ。

七日　天氣よし。昨日よりいわしの網ひくとていとにぎはし。海の所々に魚の山をなす。さであらば、わらはにもすくひえらるべくおもはれたり。

すまの浦おきには魚の山なして
　いそくは人の波ぞたちける

小鯛、いか、きすなどさま〳〵なる魚のまじれるをとり〳〵にもちはこひて、所のものならぬ人々にまでも、いくらにても持行たまへとおほやうにいへれは、かへりておほくはえられぬこゝちのせられたり。

八日　天氣よし。

九日　天氣よけれど、月のころならねは、ことたらぬこゝちす。

十日　けふも。

十一日　天氣よし。神戸に行きすは山へのぼる、常磐樓にて晝飯をすまして生田社へまゐり、かへ

りによしを氏をとひて、夕かたやとにかへる。
十二日　また神戸にゆきて、布引の瀧を見る。策郎なとはる〱行きて見るほとのものにて侍らすといひたれとも、

　來てみれは聞きしにましてたけ長く
　　はゝもほとよき布ひきの瀧

たへかたかりしあつさをもわすれて、あせにしめりし衣のつめたきをおほゆ。
十三日　天氣よし。
十四日　天氣よし。武なとを引つれて舞子へ行く。こゝはすまよりもにきはしく、ことに料理屋なともおほくありて、いつれも繁昌のやうすに見うけたり。

　おのつから舞子のはまの松かえは
　　をとるすかたにみえにけるかな

日のくるゝころまてあそひてかへる。
十五日　天氣よし。
十六日　日々鰯の大獵にて、浦風も何となうなまくさくおぼえて心わろきに、はまかたはそれかためにきはひぬ。
十七日　東南の風つよくて、大あれにもなるへきけしきなれは、漁夫らはせあつまりて、舟を高き所へひき上なとすとて、こと〱しきさわきなりしかと、さほとのこともなかりき。
十八日　あつさ九十度をこしぬ。
十九日　天氣よし。日置師き玉ふ。

（つゞく）

下鴨の夏越の祓にまうで、

高等女子師範學校
四年生　平野みち

我國のむかしをしたふ人々多くなりゆくまゝに、ところどころの御社のまつりなども、古式に復せられゝはいとよろこばしきこととなりかし。こぞよりは、下鴨のなごしの祓もふるきかたに行はれぬ。其をりまうでんと思ひしかど、さはることありてえまうでざりしに、けふは天氣いとよくあつさもやゝかろければ、よろこびて午後六時すぐる頭姉上とともにいでたつ。まづ御苑内にいるに、芝生いあをみ渡りて東山につゞけるかごとく、くちなしのそらにむらさきひきたらんやうなるは西山なり。御所の根屋はたかくそびえていとたふとく、ゆきかふ人もたえ〴〵にてなにとなうものさびし。ふるき都の夕ぐれぞあはれなる。

東京の宮城のことなど思ひいでゝかたりつゝゆく。それより町をすぎ賀茂川にわたせるあふひばしをわたりて下鴨村にいる。こゝはわがをさなかりしときすみけるところにて、其頃あひしりてつねにあそびたるおもしろき老婆あり。まづそのもとにゆく。おもひがけずとていたくよろこび種々もてなす。今年は七十三になりぬといへど、すこやかなるさまむかしにかはらず。やがて此老婆につきて御社にまうづるにかゞり火いとあかくひるのごとし。はらへは本社の傍の泉の上にまつれる御社にてぞおこなはる。此泉は糺の川のみなもとにて御社の前にいでゝ池となる。こゝには竹にてつくりたる矢をつかねてさしたり。御前の鳥居

の兩かはにはみそはぎをつけ、わらにてつくれる輪をおきて其中をゆきゝす。わたりには村の人をはじめ人々つどひあへり。雑色のかゞり火たくもめあたらしく、おいたるがしたりがほなるもおもしろし。なほはやければ森の小ぐらきところをあゆみつゝはじまるをまつ。かゞり火のもとはあつけれど、秋たちける日のしるしにや、こゝはきりゞすゞむしなどのこゑあやをなし、たもとをふく風もいとすゞし、かしこへは椎ひろひに、こゝらへは杉葉あつめにきにけり、など老婆のいへば、森もなつかしきこゝちして、こしかたの物がたり、餘念なし。

はじまるといへば、其ところにゆくに、しばしありて宮司禰宜主典など列をなしてきたる。宮司は黒の袍にてそのほかは祭服なり、皆雑色二人をつれたり。一人はかさをさし一人は提灯をもつ、池の前の砂はらにしきたる圓坐になみをるさまいとうつくし。かくて御社にみきみけくさ〴〵のものをそなふ。これも古式なればよそのとはことなりとか。ふたゝびもとの坐にもどり、宮司をはじめ一同にはらへのこと葉をのぶ。そのはじまりのうち手をあひづに、一人の雑色池の中にいりこゝにさせる竹の矢をぬきて水の中になぐれば、見物せるわかものどもまちかまへとびいりてこれをとる。水おといとかまびすし。この矢をとりて家におけば盗人のいらぬまじなひになるといふ故、かくはあらそふなりとぞ。

水おとのしづまる頃ははらへもをはりぬ。こぞよ

り見んとかまへたることなれば、歸らば母上にかたらん。友だちのもとへもなど思へばいとうれしけれど、老婆はむかしのやうにくげがたのきまさぬがいとさびしとてなげく。森のくらきところをたどりゆき、その家にいたりてしはしかたるに、むかへのくるまもきたりしかば、のこりをしけれといとまをつげて家路につきぬ、賀茂の川風きよく身さへ心さへいとすずし。

雜報

●耳の作用　は聞くに在り。聞ゆる者は外にあれば、善きも惡しきも有りぬべけれど、聞くことは我にあれば、惡しきを捨てゝ善きを取る、固より心のまゝなるべし。脩身齊家の談、大人君子の說は、聞ゆるものゝ善きものなり。俗謠俚歌の聲、鄭衞淫靡の樂は、聞ゆるものゝ惡しきものなり。さるにても、吾人は當世女子の耳の作用の、たゞ其の善き者に聾にして、其の惡しき者に聰なるを聞く。未聞かず。其の聞くべき者を聞くを好みて、其の聞くべからさる者を聞くを好まざるを、是も亦吾人の僻耳なるか。

●目の作用　は見るに在り。見ゆる者は外にあれば、正きも邪なるも有りぬべけれど、見ることは我にあれば、邪なるを去りて正きに就く、固よ

り心のまゝなるべし。貞女節婦の傳、聖賢道義の書は、見ゆるもの、正きものなり。演劇手踊の技、稗史小説の文は、見ゆるもの、邪なるものなり。さるにても、吾人ハ當世女子の目の作用、のたゞ其の正き者に暗くして、其の邪なる者に明なるを見る。未見ず。其の見るべきものを見るを好みて、其の見るべからざる者を見るを好まざるを、是も亦吾人の僻目なるか。

●論説はぬき　郵夫新刊の雜誌を送り來れば、取る手も遲しと封紙を去る。その目錄を目ざとに見て、先その面白かりぬべきものより讀む。有りのことごと讀むとならば、それにても宜し。論説はいつも〳〵ぬきにし給ふよ。あはれ、雜誌一部の骨子は論説に在り。記者編輯の苦心は論説に在り。その骨子を捨てゝ、その苦心の所を見ず、さては購ひ讀む甲斐も無かるべし。記者も如何ばかり口惜しかりなむ。これその六ケしくして、解り難きが故なるか。さりとてはすべも無けれど、婦女子の雜誌は多く假名付なり。學問する心がまへに勉めて讀み、猶わからぬは人にも問へかし。或ハその小言めきたる議論の、己が心にいぶせきまゝに、論語は頭痛の書ぞと言ひけむ昔の人を氣取りてにか。さりとては糞土の墻、實に爲ん術も無きことなり。兎まれ角まれ雜誌を見て論説を讀まぬは、猶羹を啜りてその胾を食はざるが如し。是當世女子の通弊なり。さりとて女鑑を讀み給ふ姫君等に限りては、固よりかゝる事の有るべき謂はなかるめれど、……

●女郎花の一束　中古の歌學者、女學生のことを、女郎花によせてよめる歌いと多し。その古今集に載れるもの殊に興味あり。左にその二三首を錄して、今の女學生に示し參らせむ。

女郎花、うしろめたくも、見ゆる哉。あれたる野邊に、ひとりたてれば、

女郎花、秋の野風に、うちなびき、心ひとつを、たれによすらん。

女郎花、うしと見つゝぞ、行過ぐる。男山にし、たてりとおもへば、

人の見る、ことや苦しき。女郎花、秋霧にのみ、立かくるらん。

中古に女學校ありしか否は、吾人これを知らず。又歌學者が千年の未來を想像りてよみ出でしか否は是亦知らず。されども、今日一人にて下宿屋におはす女學生を見まつれば、いかにもうしろめたく、香水御髮にしたゝり、肩かけよほろを沒する方様を見れば、誰に心をとまづあやぶまる。又書物片脇にさしはさみて、誰憚らず、御同乘に車いそがせらるゝは、道すがらうしと見つゝも行かるゝなり。さても又一たび醜聞とやらん浮名たてられたる人々よ。はじめの程は、そを心苦しとにや。秋霧のおくに人目を避け給ふとか。されど秋霧を吹き拂ふ風のありなしには拘らで、忽に復絕間より顏さしいだし給ふと聞けば、こは今の世にはあてはまらずなん。あはれ今の女學生たちよ。歌學者といふしれ者の、人情を穿てるには驚き給はずや。

●そゝろありきの記　この月十四日、月見にとて九段に物しけるかへさ、とある牛肉屋の前をとほりけり。三人の女のいづるあり。髪は皆一様に束髪とかいへるにて、又一様に紫の帛紗包をわきばさめり。何處の女學生にか。さても男とゆきあひかしら、君などよびとむ。酒などあきなふ家の婢なめり。さてもわからぬ英語やうの語にて、話などうちし、又時々は讃美歌やうのものをうたふ。いとあやし。狐か。九段の坂にてかげをかくしたれば。などいまはしさに、月見の興もうちわすれ、つぶやきながら家にかへりぬ。（つゞく）

●少女の美行　崎玉縣入間郡豊岡學校の生徒なる瀧澤ふくは、今年僅に十二歳にて母と兄とか細く立つる烟の中に養育せらるゝ少女なるか、その行正しく、學のわざにもをこたりなく勤しみ勉むるから、常にその級の首席をさへ占むるなり。さるか上に其の性勤儉にして、美しき衣、甘き食などは好まず、母より與ふる湯錢、人よりもらひ受けたる金、こと〴〵く貯へ置きて、みだりに費さず。其のわたりの人々まても年に似げなき賢き少女よと感じあへる程なり。

去年のくれの事とかよ、教師より震災地慘状、両陛下より賜はりし救恤金の事なと聞きて、いかにか思ひけん。頻りに涙をなかして居たりけり。さてその日の放課後丸屋といへる製絲場に行、外國人か古毛布古衣なと買ひ集めて、震災地の被害者に贈るとき、いと思ひ入りたる様なりしか、翌日受持の教師につきて義捐金をいたさんといへ

り。教師は其少女か平生の行には感じてありつるも、其親は富めるにもあらず、かゝる事に心付くべき氣篤のものとも思はれざれば、其の金の出所いかに、誰人に勸められたりやなど問ひしに、少女はすゝめしものはあらざれど、外國人すら、くさ〴〵贈物すと聞侍り。さるを同じ御國の人の知らす顔してあるは情なしのことゝ思へるか故、僅なれとも、平素已か貯へおきたるをみなから出し侍るなりと答へたりとぞ。あはれ、絹の衣に身をまとひ金紋うちたる車に乗りて、都の街行きかふ嬢等よこの少女の行を見て何とか思ひ給へる。

●餘芳とをしへの庭　　餘芳は著者にねさりがたき事のありて、こたひは掲ぐる事を得さりしかど、次回にはきと登載すべし。をしへの庭は歌文いまだ集らぬをもてこたびかぎり省くことゝなしつ







天賞堂諸物品調製之目的

凡そ時計指輪等金屬を以て調製する物品にハ單に實用目的のものあり裝飾目的のものあり實用目的の物品には敢て裝飾を要せざれども裝飾目的の物品殊に携帶具に至りては裝飾たるに足るべき性質形狀を具備せざる可からず（例は時計の如き實用目的に限るとせば專ら機械の堅牢なるを選び其外側は銀或は銅にても可なりと雖も裝飾目的に至りては內部の機械最良なるが上にも外側の金質製造等を精選すべきものなり）然るに世間往々此目的を混同するに由り或は廉價を主として調製粗惡に流れ啻に裝飾に適せざる而已ならず實用にも適せず却て其物品を携帶あるが爲に名士の品位を劣し閨秀の艶麗を損することありとす（衣服家屋調度みな盡く然り其中にも携帶具に於て此事尤も多きは言を俟たず）是れ裝飾物品には其風韻雅致を備へ品質の精良と製作の巧妙を具するの必要あれバなり

弊堂夙に此に覺る所あるを以て實用品ハ專ら堅牢にして廉價なるを主とし裝飾品には第一に品質（即ち金銀寶石の品質を精良にし如何なる場合に於ても粗惡の品質を調製せず販賣せざるなり）第二に製作（即ち調製の初に於て卓絕の意匠家に謀りて形狀の新規高尚なるを擇び之を精妙なる工匠家彫刻家に囑附して製作せしめ以て美術の完備を專らとするなり）第三に時樣（即ち時々の流行に注意し我國交際社會の時好は勿論歐米文明諸國の流行にも着眼して其中にて風韻雅致に富めるものを擇び或は是に加ふるに我國の妙所を以てするなり）此三件を以て調製の目的とし猶中外愛顧諸君の爲に購求の便利を謀ると數年一日の如し弊堂が諸君の愛顧を得て今日の繁榮あるは實に之に由るを以て素より偶然に非ざるなり是に於て弊堂は更に此目的を擴張し今般特に自から商品販賣店則を設け來る廿五年一月一日を期し賣品には都て正價（正札附）を附し謹で之を遵恪して敢て違ふと無く諸君愛顧の恩に報ひんと期す諸君舊に倍して愛顧を垂れ賜はゞ信に弊堂の慶幸なりと云爾

明治廿四年十二月廿五日

天賞堂主人
江澤金五郎 謹白
東京市京橋區尾張町二丁目十八番地○電話番號三百三十三

天賞堂商品販賣店則

品質を證明する事

時計機械の中にて認め易き所に鎖指輪帶留貴婦人用其他黃金の調製品には天賞堂の刻印を打ち弊堂の販賣品たる事を證し次に金性の刻印を打ち其純質の幾許たるを證し（凡そ黃金調製品は純金二十四を以て基とす故に二十と刻印するものには廿四の內にて純金二十雜物

（銀若くは銅）四を含むの證なり十八十六十四の刻印みな此例なり由て此證符あるものは金性一目して瞭然なるを以て通貨に於けるも同様なり）次に番號の刻印を打ち調製原簿に證すべし是は弊堂の原簿に一々以上の要領を記し購求者の氏名をも記し置くに付番號に照せば都て明瞭に何時にても知り得べし遺失盜難等の節は搜索するの便利是に若くは莫し此證明は品質の確實なるを證明する爲なれば萬一其品質にして刻印に相違する物あらバ弊堂乃ち其責に任じ何時にても望に應じて他の物品と交換し又い求に應じて原價を還附すべし

製作を證明する事

鎖指輪帯留其他寶石寶玉貴金屬の裝飾美術品にして殊に我國に於て著名なる工匠家或は彫刻家に囑附して製作せしめたる巧妙の物品には前件刻印の外に其製作人の銘を打たしむべし若し萬一其製作贋銘たるの證據ある時は弊堂其責に任ずると前件に同じかるべし

保存を請合ふ事

弊堂の刻印を打ちたる時計は其機械の組織に從ひ十ヶ年より三十ヶ年までの機械保存安全請合證書を附置すべし若し此請合年限間に人爲の破毀又は外より來るの障害に非ずして自然と機械に變化を生じ使用に堪ざる時は弊堂は新規の時計と交換するか但は原價を還附するか其望に應ずべし

油注并に磨直の事

弊堂の刻印を打ちたる時計い前件の請合期限内は毎年一回の油注并磨直しは都て其需に應じ決して別に代價を要求せざるべし其他鎖指輪帯留等の掃除磨直も亦是に准じて代價を要求せざるべし

交換并に買戻の事

弊堂販賣物品は何品たりとも購求後もし其意に適はざる時は購求當日より時計い三十日他の諸品い一週間以内は（府外は相當の往復日數を加ふべし）凡そ其物品に破損毀傷なきに於ては何時にても需に應じて他の物品と交換し又は原價にて買戻し聊かたりとも其爲に手數料若くは割引等を加へざるべし但し特別の注文又は好みに依りて調製したる物品は此限にあらず

巡回販賣の事

各地方の愛顧諸君より郵便を以て弊堂物品の調進を求めらるゝ近時日々に其數を増加せり然るに書狀往復の注文にては多數の物品中にて意に適するものを撰擇すると能はざるは尤も顧主の不便たるを知り一兩年來弊堂の堂員に物品を提携して各地を巡回せしめて之を試たるに大に顧主の便利を見たるに由り漸次擴張の計を立て向後い毎年一回若くは二回全國都會の市に向て必らず堂員を巡回せしむべし而して此巡回堂員は都て前件の店則に從ひ物品の交換は勿論油注及び磨直し（弊堂の刻印を打ちたる時計は其料を要せず）をなすと本店同様たるべし但し此巡回堂員の氏名滯在日數巡回路順及各地宿所等は巡回に臨み豫め其地方の新聞紙を以て廣告し愛顧諸君の注意に供すべし

和漢文數學 **講義錄**

毎月二回三回十七日發行

第二號（二月三日發行）目錄左ニ

明治廿五年一月十七日第一號既刊

本誌ハ前金ニアラザレバ發送セズ●郵税一册五厘宛●十部前金八十錢●二十部前金一圓五十錢●三十部二圓十六錢代金ハ郵便爲替小爲替銀行爲替又ハ逓送便ニテ御送附セヲレタシ●郵便爲替ハ四谷郵便支局宛●郵券代用一割増ノヿ

發行所　東京四谷區南伊賀町五番地　**耕學社**

速記法 自宅獨習生徒 募集

卒業期三ヶ月●申込來二月卅日迄

本館講師青森先生ノ速記法ニ熟達セルハ夙ニ世人ノ知ル所ナリ昨年以來**國會**議塲ニ於テ之ヲ實驗シ大ニ悟ル所アリ今般國會筆記者幷ニ學生警官等演說講談ヲ筆記スル者ノ望ニ應シ**教授法**ヲ改良シ幷セテ自宅獨習生ヲ**募集ス**入館費金六十錢前納セハ他ニ一切費用ヲ要セズ**教授書**ヲ送付シ且丁寧ニ通信教授シ卒業ノ者ニハ證書ヲ付與ス○爲替ハ麴町郵便局宛振込ムベシ

東京麴町區隼町十九番地　**正義館**

國光第三卷第六號

目錄

定價一冊金十三錢
全國無遞送料

女鑑第六號目次

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京麹町郵便局へ御振込可被下事○郵便券を以て代金に換用せらるゝ時は一割増の事○別に領收書差出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若し強て領收證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附の事○未税の來書は一切受取不申候事

女鑑

毎月二回發行 五日 廿日

定價壹冊金十錢
半ヶ年前金壹圓拾錢
壹ヶ年前金貳圓
全國無逓送料
廣告料 五號文字廿三字詰 一行十錢

明治廿五年一月十九日印刷
同年同月二十日出版

東京麹町區平川町五丁目十六番地
發行兼編輯人 西澤之助
同 印刷人 長屋基彦
同 發行所 國光社

(逓信省認可)